

# 設置の趣旨等を記載した書類 目次

①	設置の趣旨及び必要性	1 頁
②	学部・学科等の特色	4 頁
③	学部・学科等の名称及び学位の名称	5 頁
④	教育課程の編成の考え方及び特色	6 頁
⑤	教員組織の編成の考え方及び特色	11 頁
⑥	教育方法、履修指導方法及び卒業要件	12 頁
⑦	施設、設備等の整備計画	23 頁
⑧	入学者選抜の概要	25 頁
⑨	取得可能な資格	29 頁
⑩	実習の具体的計画	29 頁
⑪	企業実習（インターンシップを含む）や海外語学研修等の 学外実習を実施する場合の具体的計画	34 頁
⑫	管理運営	37 頁
⑬	自己点検・評価	38 頁
⑭	情報の公表	40 頁
⑮	教育内容等の改善を図るための組織的な研修等	50 頁
⑯	社会的・職業的自立に関する指導等及び体制	51 頁
	【添付資料】	55 頁



## ①設置の趣旨及び必要性

### 1. 大谷大学の理念と沿革

大谷大学の歴史は、江戸時代前期 1665（寛文 5）年、京都東本願寺内に設置された僧侶の教育研究機関「学寮」に遡ることができるが、直接的には 1901（明治 34）年に東京巢鴨の「真宗大学」開校にはじまる。初代学長の清沢満之は開校の辞で、「真宗大学」が他の大学とは異なる「宗教学校」であること、すなわち「仏教の中において浄土真宗の学場」と宣言した。これは、ブツダや親鸞の思想に基づく人間形成の理念、及び平等精神に基づいて生きる人物を養成することによって、国民教育の使命を果たす意図を明確にしたものであった。

真宗大学はその後京都に戻り、1913（大正 2）年に現在の北区小山の地に移転した。この間、国家は国民教育の義務教育化をうたい、周知の通り 1918（大正 7）年に「大学令」が出されている。当時「真宗大谷大学」と名称を変更していた本学も、大学令に基づく大学となることを志向して「大谷大学」として申請し、1922（大正 11）年には文学部の単科大学として認可を受けることとなった。第 3 代学長に就任した佐々木月樵は、1925（大正 14）年の入学宣誓式で「大谷大学樹立の精神」という講演を行い、大谷大学が「宗教と教育」を両輪としつつ「仏教精神に基づく人格の陶冶」を使命とする大学であることを宣言し、その教育理念を、「本務遂行・相互敬愛・人格純真」の三モットーとして表現した。これは、「成すべき本務を遂行」し、「自ら純真なる人格を形成」し、「互いに敬い合いながら生きることのできる世界を構築」する人物の養成をもって大谷大学の使命とすることを宣言したものである。

大谷大学は、大学をめぐる状況がさまざまに変化する中でも、初代学長清沢満之や第 3 代学長佐々木月樵の両学長によって掲げられた建学の理念を順守して大学運営を行ってきた。開設当初の学則には、「大谷大学は仏教学哲学および人文に須要なる学術を教授する」とあり、具体的には「仏教学科・哲学科・史文学科」の 3 学科 1 学部体制をとった。その後 1965（昭和 40）年には、「仏教学科」から「真宗学科」が、「哲学科」からは「社会学科」が独立、また「史文学科」はそれぞれ「史学科」と「文学科」に分割されて 6 学科体制を採ることとなったが、仏教精神に基づく教育機関であること、人格形成に資する宗教学校であることを闡明にするために、この文学部 1 学部体制については、100 年近くにわたって維持してきた。

その後の社会変動によって大学の高等教育機関としての役割が多様化する中、大谷大学も、いくつもの新学科を立ち上げて対応してきた。それによって、時代と社会に即応する人物養成の責任を果たそうとした。1993（平成 5）年には国際社会で活躍する人物養成の責任を担って「国際文化学科」を開設し、2000（平成 12）年には情報化社会に対応する人物を養成すべく「人文情報学科」を開設、さらに 2009（平成 21）年度には「哲学科」内に一分野として設置されていた教育学と「社会学科」内に置かれていた臨床心理学コースを統合して、「教育・心理学科」をスタートさせ、小学校教諭・幼稚園教員の育成を開始した。

また 2018（平成 30）年度には、「文学部」に「社会学部」と「教育学部」を加え、3 学部で教育研究活動を展開する新しい体制をスタートさせた。「社会学部」は従来から文学部の中にあつた「社会学科」を、「教育学部」は 2009（平成 21）年にスタートさせた「教育・心理学科」を発展的に展開し、全学の学生数規模をほぼ同じくしたままで学部化を行った。文学部単一学部での教育活動の展開が仏教精神に基づく建学の理念堅持に繋がるものと外部からも高く評価されてきた

が、学部開設と同時に学内に「仏教教育センター」を開設することによって、仏教精神に基づく人間教育の風土を確保する体制も強化した。

今回はそれに続いて、1993（平成 5）年に開設した「国際文化学科」の教育をより充実・強化すべく、「国際学部」をスタートさせる。2018（平成 30）年に初年度を迎えた「社会学部」と「教育学部」は、今日の社会的要請に応える教育理念や各学部固有のポリシーのもと、多くの志願者を集め、それぞれに充実した教育活動を開始している。座学に力点が置かれがちな文学部と比較して専門領域に直結する現場での活動を増やし、専門分野に応じた実践的な学修活動を実現している。新たに設置を目指す「国際学部」でも、現場での体験や学びを基に、グローバル化の現実と他者に向き合って柔軟に思考し、多様な人々の共生社会を目指して軋轢や摩擦を超える方法を模索できる人物を育成する。

## 2. 本学が国際学部を設置する意味と目的

### （1）本学が国際学部を設置する社会的意味

グローバル化が進む現代の世界において、自己とは異なる文化的背景を持つ他者と接触したり協働したりする機会はますます増加している。そのため、多様な他者と新しい友好的な関係を築くことが世界のいたるところで求められている。しかし、残念ながら現状では、必ずしも他者との共生ではなく、対立や排除という憂うべき状況が世界各地で散見される。国際的な競争力を高めるための努力は、グローバル時代においては必須であるが、そうした努力が他者への対抗心となり、単なる対立や他者の排除へと繋がっていくとするならば、やがて人間社会は崩壊へと向かうことになろう。

こうした対立や排除の傾向は、現在の日本を取り巻く環境からみても望ましいことではない。「観光立国推進基本法」（2007〔平成 19〕年）の施行にもあらわれているように、日本を訪れる外国人観光客の数は増加し、経済市場のみならず、われわれの身近なところでも文化的背景を異にする人びとを多く目にするようになった。こうした状況を受けて、グローバル人材の育成が求められている。『産学官によるグローバル人材の育成のための戦略』（2011〔平成 23〕年 4 月 28 日）は、「世界的な競争と共生が進む現代社会において、日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」をグローバル人材と定義している。

だが、その定義に含まれる「日本人としてのアイデンティティ」にこそ大きな課題がある。なぜなら、従来のように共通の文化的・精神的・歴史的伝統に立脚した「日本人」としてのアイデンティティの確立はもはや困難だからである。日本の在留外国人はほどなく 300 万人に達しようとしており、うち永住者と特別永住者を合わせて 100 万人以上が既に定住している。つまり、外国人とは既に「お客様」ではなく日本で共に生きる隣人であり、日本社会のコミュニティ構成員となっているのだ。そうした「内なる国際化」が着実に進行する中、従来のように画一的な「日本人らしい日本人」のアイデンティティを前提とすることは、コミュニティ内の異文化マイノリティを否定・排除することにつながったり、いわゆる「ハーフ」「ダブル」「ミックス」など外国にもルーツを持つ日本人の存在を不可視化したりする危険を孕むといえる。したがって、「内なる国

際化」時代の他者理解に必要なのは、日本人のアイデンティティとは何かを反省的に問い続け、多様性を含む新たな日本人像の（再）構築を試みる開かれた知的態度なのである。

そのように他者理解へと開かれた自己理解を深めること、あるいは自己理解を深めて他者理解へとつなげることは、まさに開学以来、仏教精神に則った人格形成、および専門分野と合わせた総合的な人間教育を伝統としてきた本学の教育が目指すところである。なぜなら、仏教の精神において重視されるのは、①深く自己を見つめること、②他者を敬い理解しようとする努力を怠らないこと、③自他が幸福に共生する社会の創造を目指すことであり、本学ではこれを「本務遂行（③）・相互敬愛（②）・人格純真（①）」の三モットーとして長年大切にしてきたからである。この理念を、現在は「Be Real—寄りそう知性—」という言葉で表現し、現実や己の真実に向き合い、他者に寄りそえる知性の持ち主であれという教育理念として発信している。それゆえ、今日のグローバル化の現実と向き合い、他者との関わりの中で自己のアイデンティティを確かめながら、さまざまな背景をもつ人びとに寄りそえる、真の意味での国際人を育成することは、建学の精神に沿った本学の使命であり、同時に、現代および今後の日本において果たすべき本学の社会的使命でもある。

## （２）本学が国際学部を設置する目的と養成する人物像

このように、本学では従来から「本務遂行・相互敬愛・人格純真」の三モットーを理念として教育活動を行ってきた。仏教を基礎として展開される本学における学びは、これからのグローバル社会において、あるべき人間関係を考察する上で大切な手がかりを与えるものと考えられる。なぜなら、多様な文化が共存する社会において他者の人格を尊重するには、宗教への理解が不可欠だからである。宗教とは、広い意味において人間が何を尊ぶべきかを定める価値体系であり、人間としての誇りある生き方、すなわち人間の尊厳の根幹を成すものである。このように「人間の尊厳」の定義と構成要件そのものが宗教及びその文化圏によって異なることを踏まえては、多文化共生は困難であると言わざるを得ない。世界中で見られる様々な軋轢や衝突が、国家間や民族間、社会階層間だけでなく、しばしば宗教文化圏同士の対立ともいえるべき様相を呈する所以である。

したがって、宗教的観点からも自己を深く見つめるとともに、他者を理解しようと努め、その過程でさらに自己理解を深めてゆく人物、身近な他者に寄りそえる知性と感性とを磨き続ける人物こそが、これからの時代に必要とされる真の国際人であると考えられる。それゆえ、本学の国際学部は、宗教的情操に基づく自己を確立し、文化的背景の異なる身近な他者に積極的に寄りそえる人物、グローバル化の現実に向き合い、多様な他者に寄りそって多文化共生社会の創造に貢献しうる人物の育成を目指す。

このような基本的な学部としての人物養成の方針に基づき、以下に掲げる 5 つの学位授与方針（DP）を定める。これは、本学において養成すべき人物が学位取得にあたって身につけておくべき力である。

- (DP1) 外国語を使用して、4 技能（聞く、読む、話す、書く）を活用した十分なコミュニケーションができる。〔技能・表現〕
- (DP2) 日本語を使用して、正確に読解し、論理的に表現し、的確に議論することができる。〔技

能・表現]

- (DP3) 国際的視座にたつて、人間・社会・自然環境について、幅広い知識・知見を身につけている。〔知識・理解〕
- (DP4) 人文諸科学の幅広い知識を用いて事象を多角的に考察し、多文化共生のための問題解決策を提案できる。〔思考・判断〕
- (DP5) 文化的背景の異なる他者と自己への理解を深めながら、さまざまな課題を設定し、主体的に問題解決に取り組むことができる。〔態度〕

この学位授与方針にしたがって、学部内に「国際文化学科」1学科を置き、以下のような特色ある教育研究と人物養成を目指す。

#### <国際文化学科>

国際学部国際文化学科の専門的な学問領域は、文学、言語学、比較文化学、歴史学などを含む地域文化研究及び比較文化研究である。こうした学際的側面を持つ教育研究を通して、固定観念にとらわれない幅広い視野と柔軟な思考力を培う。さらに、座学に力点が置かれがちな文学部と比較して専門領域に直結する現場での活動を増やし、専門分野に応じた学修活動を展開することによって、真の国際人、すなわちグローバル化の現実に向き合い、多様な他者に寄りそって多文化共生社会の創造に貢献しうる人物を養成する。

既存の文学部国際文化学科でも、すでに上記の理念と教育研究に基づいた教育活動を行なっているが、国際学部においては実践系科目の全コース必修化やボランティアに関する科目の新規開講など、体験や実践を基にした学びの強化をさらに推し進めていく。

## ② 学部・学科等の特色

### 1. 多文化共生のための地域文化・比較文化研究と宗教教育

国際学部・国際文化学科は、中央教育審議会「大学の機能別分化」のうち、「総合的教養教育」に主軸を置き、ボランティアや国際交流など「社会貢献機能」を部分的に実践する学部として位置付ける。グローバル化の進行する現代社会において、地域文化・比較文化研究によって培われた論理的思考力、表現力、理解力を活かし、国内外を問わず、また分野や職種を問わず、あらゆる現場で多様な他者の人格を尊重しつつ、コミュニケーション能力を発揮して多文化共生に貢献しうる人物を育成する。グローバル時代の多様な他者と共生するには、既述のとおり、宗教への理解および宗教的観点からの異文化理解が必要であることから、本学部では仏教に基づく生命への畏敬と尊重を学びの根底に置き、すべての学生が1年次において仏教について学ぶ「人間学」に加えて、宗教と文化の多様性を理解するための学科専門科目「世界の宗教と文化」を置く。

## 2. 全学年で演習型少人数教育の実施

新しい時代に必要なのは、多様な人間の在り方を受け止め理解できる柔軟かつ緻密な思考力、そして思考の成果を正確に他者に伝える表現力である。こうした力は、様々な資料を正確に読み、思考を言葉にまとめ、それに対する他者の意見をフィードバックする過程を丁寧に何度も繰り返しながら、時間をかけて培われていくものである。そのため、第1学年から第4学年まで各学年に置かれる「国際文化演習」では、一貫した少人数教育をおこなう。1年次は1クラス平均25名、2～4年次には1クラス平均15～16名の少人数クラス・ゼミでの発表や議論と指導の積み重ねにより、2万字におよぶ卒業研究の完成に至るまで時間をかけて思考力と表現力を鍛え上げる。また、語学教育においても、できるだけ少人数での双方向的なやり取りを通じて学べるよう、1クラスを35名以内に制限する。

## 3. 実践系科目の充実

本学部・学科では、世界中の情報が容易に手に入る現代だからこそ、体験に基づく学びや実践的コミュニケーションを通じた学びを重視し、2年次には全員に「実践文化演習」の履修を義務付ける。「実践文化演習」には、海外での語学研修や文化研修に加えて、街中での活動や合宿を取り入れ実践的に英語を学ぶ「English Workshop」「English Workshop & Camp」や、集中講義形式による初修外国語の語学集中科目（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語）、京都でのフィールドラーニング科目を用意し、海外でも、京都でも、学内でも、体験と実践を通じて学びを深めることができる。「実践文化演習」に加えて、1年または半年の間、海外への正規留学や交換留学、あるいは語学留学に行き、本学を4年で卒業することも可能である。

## ③ 学部・学科等の名称及び学位の名称

国際学部は、グローバル化する社会において必要となる、「歴史や文化、価値観を異にする、身近な他者に寄りそえる知性と感性を身につけた人物」の育成を1学科で進めてゆく。学部名称は今後の展開をみすえて、包括的な上位概念である「国際学部」とする。また、学部の英訳名称については、Faculty of International Studiesとする。

国際学部に設置する学科は、国際学部が文学部国際文化学科を引き継ぐことから、その名称を「国際文化学科」とする。今日の国際社会にあっては、多様な文化の共存がみられる。そうしたなか求められるのは、自己のアイデンティティを確立するだけでなく、それをふまえて他者を理解し、さらにまた自身のアイデンティティを反省する人物である。この名称はそうした多種多様な文化理解を基礎とする教育課程や人材育成方針を表わしている。また、英語名称はDepartment of Intercultural Studiesとする。

学位については、文学部国際文化学科の教育伝統を引き継いでいることから学士（文学）とし、英訳名称はBachelor of Artsとする。

## ④ 教育課程の編成方針の考え方及び特色

### 1. コース編成

1年次には全員が共通コースに所属し、2年次以降は英語コミュニケーションコース、欧米文化コース、アジア文化コースに分かれる3コース制を取る。より具体的には、1年次には4クラスに分けられてクラス担任教員の指導のもとで「国際文化演習I」を初めとする必修科目を履修し、2年次以降は学生の関心に応じて、英語コミュニケーションコース（1クラス）、欧米文化コース（英米分野2クラス、ドイツ分野1クラス、フランス分野1クラス）、アジア文化コース（中国分野1クラス、韓国・朝鮮分野1クラス）の3コース（計7クラス）に分かれ、それぞれ所属するクラス＝ゼミにおいて専門分野の文化研究を進める。

### 2. カリキュラムの構成

カリキュラムは表1で示すように、「共通基礎科目」、「学科専門科目」、「現代総合科目」の3区分で構成する。

#### （1）共通基礎科目

「共通基礎科目」は「総合科目」「大学導入」「必修外国語」「選択外国語」からなる。「総合科目」の「人間学Ⅰ」「人間学Ⅱ」は仏教精神に基づく人間理解と学問の課題について学生の意識を喚起する授業群であり、「学科専門科目」の学修を、本学の教育理念から方向づける役割を担う。「大学導入」の「学びの発見」は、主体的な学びへの転換、そのための姿勢やスキルや情報を身につける導入の役割を担う。「必修外国語」の「外国語Ⅰ・Ⅱ（英語）」では、グローバル化した現代社会において必要な知識・情報を得て相互理解を円滑に進める上で不可欠な国際語である英語の運用能力を確保する。同じく「外国語Ⅰ・Ⅱ（初修外国語）」では、英語以外の外国語を学ぶことで言語文化の多様性を理解し、国際コミュニケーション能力を高める。さらに「選択外国語」の履修により、英語、初修外国語、あるいはそれ以外の言語の力を伸ばす。

#### （2）現代総合科目

「現代総合科目」には「キャリア形成系科目」「自然生命系科目」「歴史文化系科目」を置き幅広い知識や教養を身につけ知性を高めるとともに、専門の研究に学びをいかすことができる科目とする。

- キャリア形成系：社会貢献のために必要な知識や能力を身につける科目群（32科目）
- 自然生命系：自分たちを取り巻く自然環境を知り、いのちやこころとは何かを考察するための科目群（36科目）
- 歴史文化系：人間の歴史と文化をあらゆる視点から理解することをテーマとした科目群（36科目）

#### （3）「学科専門科目」

国際文化学科では、地域文化研究及び比較文化研究の視点と方法を用い、多様な文化事象につ

いて考察する主体的な学修を通じて、4頁で述べた国際学部のでめる5つの能力(DP1~DP5)を身につけた国際人、すなわち「グローバル化の現実に向き合い、多様な他者に寄りそって多文化共生社会の創造に貢献しうる人物」を養成する。「学科専門科目」はこの実践学修の中核に位置付けられる。「学科専門科目」は、「演習」「概論」「講義」「実践研究」の科目区分で構成する。

- 演習

「演習」は「国際文化演習 I~IV」からなる。これらは各学年の必修であり、少人数クラスのゼミナール形式をとる。ゼミはDP1~DP5の能力を総合的に応用運用し、主体的学修実践を深める態度と能力を身につける場である。また、発表や議論の積み重ねによって思考力と表現力を鍛える場でもあり、このゼミが学生にとって学修の拠点となる。「国際文化演習(ゼミ)」の担当教員が指導教員となり、学生との対話を通じて、関心の明確化と系統的な履修をサポートする。

- 概論

地域文化・比較文化を学ぶための入門として、1年次には前期に「国際文化概論」、後期に「国際言語概論」を置く。いずれも複数名の教員によるリレー式講義であり、「国際文化概論」では、世界の文化の多様性と文化研究の多様な観点を理解することを目的として、英米、ドイツ、フランス、中国、韓国・朝鮮に関する文化研究の入門的講義をおこなう。

「国際言語概論」では、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語についての概要を学び、言語の多様性と言語と文化のつながりを理解し、多言語状況への対応力を高めることも目指す。これらの概論科目によって、DP3における知識・知見の獲得を主眼としつつ、DP4における多角的考察の手がかりや契機を提供する。

- 講義

「講義」は、日本を含む世界の言語文化事象や、その背景にある社会・歴史・宗教を考察の対象としてカルチュラル・スタディーズや比較文化研究及び関連学問領域の視点から読み解く多様な講義群で構成する。第1学年から第4学年の間に、学生は学修の方向性と段階に応じて、必要な科目を選択する。学生が主体的な資料収集・分析・考察を実践するためには、文化事象への様々なアプローチの方法について幅広い知識を持ち、自身の関心とテーマにふさわしい視点と方法論を選択する必要がある。そのため、関心に直結するテーマだけに限らず多彩な講義を聴講することによって、対象を国際的観点から比較対照し考察するための幅広い知識(DP3)と、考察対象たる文化事象を多角的に考察する視点と動機(DP4)を獲得し、自らが主体的学修を遂行するに必要なレベルの対象・視点・方法についての知識を学ぶ。

- 実践研究

「実践研究」は「実践研究 A」「実践研究 B」「実践研究 C」で構成する。「実践研究 A」は第1学年必修の「英語基礎演習」に対応し、全学部・学科生が国際コミュニケーションや情報収集に必須であるとともに、第2学年以降の学習と研究を支える英語力(DP2)を高める。

「実践研究 B」は第2学年以降の選択必修科目であり、体験と実践を基に学ぶための多様

な実践系科目で構成する。科目群は「実践文化演習」と「English Workshop」とに大別される。「実践文化演習」は、海外や国内の現場で言語文化を学ぶ現地研修・フィールドラーニング科目と、初修外国語をネイティブ教員から実践に近い形で集中的に学ぶ語学集中科目からなり、「実践文化演習 a」から「実践文化演習 l」までの 12 科目を用意する。「実践文化演習 a」ではフィールドワーク（聞き取り・観察など）の技法と倫理の基礎を学び、京都での調査計画・実践を通じて日本文化に精通しつつ、異文化との接点を考察することで、グローバル化する社会の現実に対応する力を養う。「実践文化演習 b, c, d, e」（ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語）では、実践的なコミュニケーションに必要な各言語の表現を集中的に学ぶことで、日常会話や意見交換ができる語学力を養い、後続する交流会で身についた力を確かめる。「実践文化演習 f」では事前講義とカナダ（トンプソン・リヴァーズ大学）での英語研修及び現地の小学校訪問やボランティア活動などを通じた交流により、英語運用能力を高め国際感覚を養う。「実践文化演習 g」は台湾（淡江大学）、「実践文化演習 h」は中国・北京（首都師範大学）への中国語語学研修と事前講義からなり、中国語運用能力を伸ばすとともに中国や華人社会の文化諸相を学ぶ。「実践文化演習 i」は韓国（慶熙大学校）での語学研修と事前講義からなり、韓国・朝鮮語の運用能力を伸ばすとともに韓国・朝鮮文化への理解を深める。「実践文化演習 j」はドイツやフランスの文化、「実践文化演習 k」はインドの宗教と文化、「実践文化演習 l」は中国の宗教と文化を事前講義と現地研修を通じて学ぶもので、事前講義で学んだ言語・宗教・歴史・社会についての知識を現地で検証することを通じて、生きた文化の諸相を理解し、知識と体験に裏打ちされた思考力の基礎を養う。学生はこれらの授業を履修することで、外国語の運用能力を高め（DP1）、国際的視野に基づいて考察する力を獲得するとともに（DP4）、文化的背景の異なる他者との共生を目指す姿勢を身につける（DP5）。

「English Workshop」は、「English Workshop & Camp」「English Workshop 2, 3, 4」の 4 科目からなり、実践的に英語の運用能力を伸ばす演習である。「English Workshop & Camp」では、日本と海外の文化について英語で学び、街中で外国人観光客にインタビューをしたり、留学生と英語でディスカッションすることで 4 技能の向上を目指す。「English Workshop 2」では京都を紹介するための語彙や表現を学び、実際に京都市内を観光案内する学外実習を通して実践的な英語力を養う。「English Workshop 3」では、様々な職種に関する英語資料の読解やディスカッションなど、英語を通じたキャリア教育によって働くための英語力の基本を身につける。「English Workshop 4」では、飲食店や土産物店などで接客する際に用いる英語を学び、学外実習を通して英語での対応力を伸ばすことを目的とする。学生はこれらの授業を履修することで英語の 4 技能を伸ばし（DP1）、英語での交流を通じて多角的視点を獲得するとともに（DP4）、他者理解を深めて多文化共生に取り組む姿勢を身につける（DP5）。

「実践研究 C」は第 2 学年以降の選択必修科目であり、読解や表現を通じて言語文化への理解を深める 11 の演習系科目で構成する。科目は 4 種に大別される。第 1 のグループは様々な場面や目的に応じた実践的英語力を身につけるための英語演習科目で、「Pop Culture in English 1, 2」「World News」「Global Communication」「Teaching English to Children 1, 2」の 4 科目がある。「Pop Culture in English 1, 2」では、英米のポップ・スターを題材に文化を学び、さらに英語を勉強する動機づけとする。「World News」では、新聞や映像など様々な

ニュースを題材として要点をつかむスキミングやリスニングなどの力を伸ばし、最新のニュースについてディスカッションも行う。「Global Communication」では社会における実践的な英語を学ぶことを目的とし、仕事で遭遇する場面に必要な英語力をタスクやロールプレイを通じて身につける。「Teaching English to Children 1,2」は子どもへの英語の教え方を学んで実践する演習であり、英語の指導法を基に授業計画を立て、教室運営に必要な表現を使用して子ども向きの英語授業を行う力を養う。第2のグループは、英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語の読解や会話など言語学習を通じて文化への理解を深める「言語文化演習」である。「言語文化演習（英語）」では文化に関する資料講読と作文を通じて4技能のうち「読む」「書く」力を伸ばす。「言語文化演習（ドイツ語）」では会話や議論を通じたドイツ語コミュニケーション力の強化を行う。「言語文化演習（フランス語）」では文化に関する資料読解を通じてフランス文化への理解力と情報収集力を養う。「言語文化演習（中国語）」では発音、語彙、文法事項を学び、総合的な中国語運用能力を伸ばす。「言語文化演習（韓国・朝鮮語）」では韓国・朝鮮語資料を用いた事例研究を通して文化理解を深める。第3のグループに対応する「表現文化演習 1,2」は、文化表現としての身体の動きを理解し、演劇や舞踊など舞台における身体表現を通じて文化理解を深める演習である。「表現文化演習 1」ではインドの古典演劇論に基づく表現技法を身につけ、物語を創作して実演発表を行う。「表現文化演習 2」では欧米と日本の伝統的リズムを受け継ぐダンスを体験し、独自のダンスを創作・発表する。文化表現における身体性の役割を理解し、身体を用いた自己表現とコミュニケーションの重要性を知ることで異文化への理解を深め、関心を高める。第4のグループは「西洋史文献を読む 1,2」であり、西洋あるいは欧米の歴史的に重要な文献・史料、とりわけ、アメリカ史や日米関係史に関わる、アメリカ独立宣言、日米和親条約、日米安全保障条約などを英語と日本語で読み、世界史的背景とともに学ぶ。学生はこれらの授業を履修することで、英語や初修外国語の運用能力を高め（DP1）、国際的視野に基づいて考察する力を獲得するとともに（DP4）、異文化理解や多文化共生への関心を高める（DP5）。

- 卒業研究

「国際文化学演習Ⅰ～Ⅲ」の担当教員の指導のもとで系統的な学修を進めた学生は、「演習Ⅳ」の担当教員の指導のもと、「卒業研究」作成に取り組む。「卒業研究」は4年間の学修の集大成であり、主に「論文」などの発表形態によって研究成果を提出する。中間報告や質疑応答と意見交換、成果提出と口述試問の審査を含む一連のプロセスの中で、学生は問題設定、資料やデータ収集、分析、考察、執筆、発表を実践しDP1～DP5の能力を総合的に身につける。

【表1】国際学部におけるカリキュラム・ポリシー

【教育課程の編成・実施方針（カリキュラム・ポリシー）】										
<p>本学では、「学位授与方針」に定められた能力を身につけるために、以下に示す3つの科目群（共通基礎、学科専門、現代総合）を基盤とした教育課程をもうけ、各科目群のねらいに応じて重点箇所を◎および○で示す。（◎：特に重点を置いている、○：重点を置いている）教育課程は、各授業科目を必修科目、選択科目および自由科目に分け、これを各年次に配当し、講義、演習等適切な方法により実施する。（自由科目は、現代総合科目および自己選択科目をいう。）</p>										
<p><b>共通基礎科目</b> 教育目標を達成するための根幹をなす科目を各専門共通の基礎科目として開講し、ブッダと親鸞の基本思想を通して人間について考える「人間学」、高校までの学びから大学の学びへの転換と専門への接続をはかる「導入科目」、およびグローバル化時代の共通言語である英語をはじめ、様々な言語を学びながら文化の多様性に触れる「外国語」を置く。</p>										
<p><b>学科専門科目</b> 各学科、コースごとの専門的な学びを修得するための科目を学科専門科目として開講し、専門の体系的理解を促す講義や、知的探究心を呼び起こす実践研究等の科目を置くとともに、自らの課題を専門分野の視点から問い直し、発表と議論を通して研究を深める演習の科目を置き、これらの学びをふまえて卒業研究の作成を目指す。</p>										
<p><b>現代総合科目</b> 専門分野の補完や幅広い現代教養（キャリア形成・自然生命・歴史文化）のための科目を現代総合科目として開講し、各自の興味や関心にあわせ、3つの系ごとに自由に科目を選択して学習する。</p>										
<p><b>I. 全学共通開講科目（共通基礎科目・現代総合科目）</b></p>										
科目群	履修単位	学年配当	(DP1)	(DP2)	(DP3)	(DP4)	(DP5)	(DP6)	各科目群のねらい	
共通基礎科目	人間学Ⅰ	4	1			○	○	◎	仏教思想を通じて、「人間」に関する考察を進め、他者と共に生きる社会への問題意識を養う。	
	人間学Ⅱ	4以上	2～4			○	○	◎	さまざまな学問分野が示す多様な人間観にふれるなかで、自己を見つめ直し、現代の諸問題への関心を喚起する。	
	学びの発見	2	1		◎		◎	○	これまでの「学習」から大学の主体的な「学修」への転換とともに、専門的な「学修」への接続を図る。	
	外国語Ⅰ・Ⅱ（英語）	-	1～2	◎		○			国際的な言語である英語について、これまでの知識を再確認し、いっそうの学力向上を図る。	
	外国語Ⅰ・Ⅱ（初修外国語）	-	1～2	◎		○			ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語といった他国語を学び、文化の多様性にふれる。	
	選択外国語	0以上	1～4	◎		○			語学力を高めるとともに、多様な文化への理解や国際的なコミュニケーション能力を養う。	
現代総合科目	キャリア形成系	-	1～4			○	◎	○	社会的に貢献するための幅広い知見を身につける。	
	自然生命系	-	1～4			◎		○	自らを取り巻く自然環境を知り、命やこころへの理解を深める。	
	歴史文化系	-	1～4			◎		○	世界の歴史と文化を多角的に理解する。	
自己選択科目	0以上	1～4	-	-	-	-	-	各自の興味や関心に応じて、他学部・他学科の学科専門科目の中から自由に科目を選択し、教養をさらに広げる。		
<p><b>II. 国際学部開講科目（学科専門科目）</b></p>										
科目群	履修単位	学年配当	(DP1)	(DP2)	(DP3)	(DP4)	(DP5)	(DP6)	各科目群のねらい	
学科専門科目	演習Ⅰ～Ⅳ	-	1～4		◎		◎	◎	-	4年間にわたる段階的な学びにより、専門における読解、思考、表現の方法を修得し、卒業研究作成に必要な探究能力を培う。
	概論	-	1			◎	○		-	専門とする学問を概観するとともに、個別の課題をその学問全体の中に位置づけ、専門に関する体系的理解を図る。
	講義	-	1～4			◎	○		-	専門とする学問の講義を通じて、基本的もしくは個別的課題に関する知識を身につけ、専門における考察能力を高める。
	実践研究	-	1～4	◎	○		◎	◎	-	専門に関する文献や技術とじかに接することにより、専門における問題を自らの課題として捉え、考察する訓練を行う。
	卒業研究	8	4	○	◎	○	◎	◎	-	大学の学びを通じて身につけた能力を総合的に駆使し、粘り強く研究を遂行する。

## ⑤ 教員組織の構成の考え方及び特色

学部の設置趣旨を踏まえ、英語をはじめとする外国語の運用能力を高めつつ異文化理解と多文化共生に資する考察力や実践力を修学できることを基本に教員組織を編成した。

＜英米文化・英語＞

- ・英米文化・英語を主専攻とする教員 5 名

＜ドイツ文化・ドイツ語＞

- ・ドイツ文化・ドイツ語を主専攻とする教員 2 名

＜フランス文化・フランス語＞

- ・フランス文化・フランス語を主専攻とする教員 1 名

＜中国文化・中国語＞

- ・中国文化・中国語を主専攻とする教員 2 名

＜韓国・朝鮮文化・韓国・朝鮮語＞

- ・韓国・朝鮮文化・韓国・朝鮮語を主専攻とする教員 1 名

以上、教授 5 名、准教授 5 名、講師 1 名をもって構成する。

現行文学部国際文化学科所属の 8 名および文学部文学科所属の 3 名の専任教員が国際学部国際文化学科に異動する。開設時の教員組織は、教授 5 名、准教授 5 名、講師 1 名であり、うち 5 名が博士の学位を有している。専門の学問領域は、言語学 3 名、文学 7 名、美術史 1 名であり、資料の丹念で緻密な読解とそれに基づく発表や議論を通じた文学部教育の伝統を引き継ぎながら、西洋と東洋の言語文化を教育研究できる構成となっている。全員が語学教育に携わる教員で、留学指導や海外研修引率も行うため、前述した実践研究（とりわけ「実践研究 B」）における直接指導を踏まえた教育とカリキュラムを実践できる体制となっている。

教員のうち講師 1 名は、2018 年度の学部改編時に文学部文学科ドイツ文学コースを廃止し、国際文化学科の欧米文化コースに統合した際、移行期間にともなって両学科にドイツ分野の学生が存在することから、臨時的にドイツ分野の専門教員を任期制教員として配置しているものである。文学部文学科ドイツ文学コースの最後の学年が 2021 年度に卒業するため、この教員の任期は 2022 年度までとなっており、完成年度である 2024 年度の配置数は、教授 5 名、准教授 5 名、計 10 名となる。完成年度においても教員数は大学設置基準の定める基準を満たしており、現況と同じ教育水準の質も確保されると考えられる。専任教員は 1 名減となるが、文学部文学科のゼミ担当も不要となるためである。したがって、教員組織は変更を行わず現行の体制を維持することになる。

年齢構成については、完成年度の 2025 年 3 月 31 日時点において、50～59 歳が 8 名、60～64 歳が 2 名となる計画で、若手不足の感は否めないものの、50 代のうち 4 名は 50～51 歳であり、教育研究水準の維持、発展に支障はない。

以上のことから、本学科の教員組織の編成は、充実した教育研究活動を完成年度まで十分に保証できるものとする。

## ⑥ 教育方法、履修指導方法及び卒業要件

### 1. 学部における学位授与方針

#### (1) 共通基礎科目の履修についての考え方

「共通基礎科目」は、英語コミュニケーションコースにおいては卒業までに最低履修単位数を30単位、欧米文化コースとアジア文化コースにおいては24単位とする。科目の区分としては「総合科目」、「大学導入」、「必修外国語」「選択外国語」からなる。「総合科目」の「人間学Ⅰ」「人間学Ⅱ」はそれぞれ4単位合計8単位を必修とする。「大学導入」の「学びの発見」は2単位を必修とする。「必修外国語」の「外国語Ⅰ・Ⅱ」は12単位を必修とし、1年次から2年次にかけて履修する。「選択外国語」は、英語コミュニケーションコースでは「インテンシブ英会話（中級）1,2」の8単位を必修とし、欧米文化コースとアジア文化コースでは2単位を必修として、1年次から2年次にかけて履修する。

#### (2) 現代総合科目の履修についての考え方

「現代総合科目」は卒業までに最低履修単位数を12単位とする。科目の区分としては、前述の通り「キャリア形成系科目」「自然生命系科目」「歴史文化系科目」を置く。幅広い知識や教養を身につけ知性を高めるだけでなく、専門の研究に学びをいかすことができる科目として、学生が自らの関心や志望に応じて選択し、卒業までに科目区分ごとに4単位以上、計12単位以上を履修する。

- キャリア形成系：社会貢献のために必要な知識や能力を身につける科目群（32科目）
- 自然生命系：自分たちを取り巻く自然環境を知り、いのちやこころとは何かを考察するための科目群（36科目）
- 歴史文化系：人間の歴史と文化をあらゆる視点から理解することをテーマとした科目群（36科目）

#### (3) 学科専門科目の履修についての考え方

学科専門科目は、英語コミュニケーションコースにおいては卒業までに最低履修単位数を70単位、欧米文化コースとアジア文化コースにおいては66単位とする。区分としては「演習」「概論」「講義」「実践研究A・B・C」及び「卒業研究」である。「演習」は1年次から4年次まで各4単位の合計16単位を必修とする。「概論」は「国際文化概論」「国際言語概論」をそれぞれ2単位、合計4単位を必修とする。「講義」は英語コミュニケーションコースでは18単位、欧米文化コースとアジア文化コースでは26単位を必修とする。「実践研究」は「実践研究A」「実践研究B」「実践研究C」で構成する。「実践研究A」は「英語基礎演習」4単位であり、1年次の必修とする。「実践研究B」は第2学年以降の選択必修科目であり、「実践文化演習」と「English Workshop」に大別される。その中から、英語コミュニケーションコースでは「English Workshop & Camp」「English Workshop 2,3,4」と「実践文化演習 f」（カナダ語学研修）を含む12単位、欧米文化コースとアジア文化コースで2単位を選択する。「実践研究C」は、英語コミュニケーションコースでは8単位、欧米文化コースとアジア文化コースでは6単位を選択する。「卒業研究」は8単位とする。

なお、本学では「履修科目の年間登録上限」について、学生が科目を履修する上で適正な学習時間を確保することを目的に、CAP 制を導入している。国際学部においては、半期 24 単位、年間 48 単位を履修科目の年間登録上限とする。

以上の（１）～（３）の科目群からそれぞれ所要の単位を履修し、その合計が 124 単位以上の取得で、卒業要件を充たすこととする。なお、学位の授与に関する方針は以下の通りとする。

### 【国際学部の学位授与方針（ディプロマ・ポリシー DP）】

- (DP1) 外国語を使用して、4 技能（聞く、読む、話す、書く）を活用した十分なコミュニケーションができる。〔技能・表現〕
- (DP2) 日本語を使用して、正確に読解し、論理的に表現し、的確に議論することができる。〔技能・表現〕
- (DP3) 人間・社会・自然環境について、幅広い知識・知見を身につけている。〔知識・理解〕
- (DP4) 人文諸科学の幅広い知識を用いて事象を多角的に考察し、人間・社会・自然環境の諸相を分析することができる。また、論理的、創造的にものごとを考え、多文化共生のための問題解決策を提案できる。〔思考・判断〕
- (DP5) 文化的背景の異なる他者と自己への理解を深めながら、主体的にさまざまな問題解決に取り組むことができる。人間・社会・自然環境に関して問題を見だし、課題を設定しようとする意欲をもつ。〔態度・関心・意欲〕

国際学部国際文化学科では、上記 5 つの能力を、卒業時に学生が身につけていることを目指す。この教育目標達成に必要なカリキュラムを編成する。同カリキュラムで規定した所定単位の修得をもって教育目標を達成したものとみなし、学士（文学）の学位を授与する。

## 2. 国際文化学科のカリキュラムと履修指導方法

国際文化学科では、「④ 教育課程の編成方針の考え方及び特色」のように編成した教育課程を、学生が自ら主体的に学修し、達成感を得つつ知識・視点・能力を修得できるよう、そのプロセスをサポートするために下記の考え方と体制で教育を行う。

### （１）履修及び履修指導についての考え方

履修及び履修指導においては、系統性、主体性、多様性に配慮する必要がある。第 1 に、学位授与方針に掲げた能力が学生に身につくためには、多方面の知識を学生に効率良く、かつ系統的に教授する必要がある。第 2 に、与えられたカリキュラムに沿って受動的に知識を学習するだけでは、主体的かつ継続的に資料や情報を収集・検討・判断していく能力や態度を身につけることはできない。学生が早期から学修の各段階において、自身の知的関心・資質・能力を、自ら客観的に確かめ、主体的に模索し、自ら選び取った道筋であることを自覚する機会を設け、主体的な学修の態度や能力そのものを養成することが重要となる。第 3 に、国際文化研究においては地域

や言語のみならず題材や視点も多様であり、関連する学問領域も言語学、文学、歴史学など幅広いことから、本学科入学生は多様な関心を持つ学生で構成されると予想される。学びの対象や探究の題材があまりに多様な広がりを持つことから、入学時にはまだ自身の関心が向かうべき方向性を絞り込めずにいる学生も一定数いると考えられるが、最終的にはいずれの学生もが自身の関心に沿った学修環境を享受できる必要がある。

そこで、1年次必修のオムニバス方式の概論科目「国際文化概論」「国際言語概論」によって、地域文化・言語文化の多様性と研究対象へのアプローチの多様性を初年次から提示するとともに、選択科目として、多様な知識を教授する講義科目群、多様な探究方法についての実践研究科目群（「実践研究C」）を用意しつつ、学生がそれらの中から、自らの関心・資質・能力に応じて、主体的かつ系統的な履修科目選択ができるよう、履修指導体制を工夫する。要となるのは各学年必修の演習（ゼミ・クラス）であり、これを履修指導の拠点と位置づけ、担当教員と学生とが適宜相談しながら、履修計画を作成する体制をとる。演習では1年次のみ同一クラスに前期と後期で研究分野の異なる担当教員が配置されているが、それは早い段階から研究分野と方法の多様性に触れさせるとともに、学生が自分に合った相談しやすい教員と出会う機会を増やすためである。担当教員との相談を通じて、学生は世界のさまざまな文化事象のうち具体的にどのような事象や問題に興味・関心があるかを確かめたり掘り下げたりしながら学習と探究のイメージを固めていき、年次によってはコースやゼミの選択も視野に入れつつ、探究の方向性に応じた系統的な知識・技法の習得を目指すべく履修計画を作成する。学生の関心は、学修の進展につれて変化するので、早期の年次に定めた視点や履修計画は、各年次の相談の過程で、系統性と主体性のバランスに留意しつつ、柔軟に更新されていくことになる。

## （2）各科目の担当教員と履修指導体制

### 1) 演習（ゼミ）

上述のように「国際文化演習」（ゼミ・クラス）は教員の指導の拠点となり、学生の主体的学修の拠点となる。各学年4単位、計16単位必修とし、1年次は前後期それぞれ専任の担当教員1名で学生25名程度、2～4年次は専任の担当教員1名に対して平均で学生14～15名程度の構成をとる。担当教員は授業の中で現代社会のさまざまな題材といくつかの社会学的視点と方法を提示し、学生との対話の中で、学生がどの地域・分野に興味を抱き、どの視点・方法に関心を持っているのかを探り、引き出す。

第1学年時の「国際文化演習Ⅰ」は、主体的学修への転換教育的役割を担うとともに、以降の学修計画作成への導入的役割を担う。クラスは学生の選択で決めるのではなく、機械的に人数が等分になるよう編成するので、多様な関心の学生で構成されることになる。その点に配慮し、地域文化・比較文化研究の基礎となる前提的知識や問題意識、学修スキルの確認・喚起に重点を置きつつ、個々の学生の関心の意識化・明確化を促す教育を行う。学生は第2学年への進級時には「英語コミュニケーションコース」「欧米文化コース」「アジア文化コース」のいずれかを選択しなければならないため、第1学年後期には、学生は指導教員との対話の中で、自身がどのような地域分野を中心に学びと探究を進めたいのかについて考える作業に取り組むことになる。ただし、入学時から既に希望するコースを決めている学生のうち「英語コミュニケーションコース」の志望者に対しては、年度初頭から履修モデルを示すことに加えて、コースの人数上限（20名弱）の

ため選考がありうることに、第1学年時の英語学習への取り組みと英語力の向上が特に重要であることを予め伝えておく。

第2学年はじめに、学生は所属コースを選択し、さらに第2学年のゼミ「国際文化演習Ⅱ」を選択する。「国際文化演習Ⅱ」において、履修学生は資料読解や調査・発表などを通じて、自らの関心を広げつつ、文化研究に必要な理解力・思考力・表現力と主体的学修の姿勢を身につける。第3学年の「国際文化演習Ⅲ」を選択する際、学修によって学生の関心が変化していた場合、ゼミ担当の指導教員と相談の上、定員の制限内で専攻ゼミを変更することが可能である。「国際文化演習Ⅲ」では、問題関心に応じた特定の題材について地域文化・比較文化研究ないし関連学問領域の視点から探究したプロセスとその成果を発表し、ゼミ全体で共有し議論することを通じて、諸地域の言語文化や社会についての理解を深めると同時に、地域文化・比較文化研究と関連学問領域の学問的手法を体得する。

第4学年時において学生は、主体的学修の集大成である「卒業研究」に取り組むが、「国際文化演習Ⅳ」ではその進行状況を発表しあい、問題設定・仮説立案・資料収集・分析考察・成果表現が的確な方法で行われているか、担当教員のサポートのもと相互に確かめる。

各学年の「国際文化演習(ゼミ)」担当教員は、学生が自らの研究関心と有機的に関連づけて「講義」「実践研究」などの科目を履修するよう意識づけ、彼らの履修計画作成をサポートする。

## 2) 概論

「概論」は既述のとおり、オムニバス方式の概論科目「国際文化概論」「国際言語概論」によって、地域文化・言語文化の多様性と研究対象へのアプローチの多様性を理解させるための第1学年必修科目である。各2単位、計4単位を必修とする。第1学年後期に履修する「国際言語概論」には、2年進級時のコース選択および履修計画のオリエンテーション的役割も与えられているため、3コースを担当する専任教員5名が主として講義を行い、授業回数のうち3回を次年度の第2学年の演習担当教員によるコース説明とガイダンス及び個別の履修相談に充てる。

## 3) 講義

「講義」は第1学年から第4学年までの間に、「英語コミュニケーションコース」では18単位以上、「欧米文化コース」「アジア文化コース」では26単位以上を選択履修しなければならない。学生が関心に応じた履修選択ができるよう、多数の授業科目を設置する一方、無計画な履修状況にならないよう、配当学年を指示している。たとえば、「グローバル・ボランティア論」は第1学年前期に割り当てられているが、これは第2学年の「実践文化演習 a」(フィールドラーニング)の履修に必要な知識や手法を予め身につけておくためである。また、西洋と東洋の文化に関する基本的な知識の獲得を目指す「ヨーロッパの文化1・2」「東アジアの文化1・2」は第1～第2学年に割り当てられ、第2学年までは地域文化研究の基盤となる広い知識を得ることをねらいとしている。第3学年以降には、地域文化研究の個別テーマに基づく「国際文化特殊講義1～6」「ドイツ文学講義1・2」「フランス文学講義1・2」が配置される一方で、グローバル化や国際化の観点から文化・社会・政治を扱う「越境するアジアの文化」「国際関係論」と、現代日本文化をグローバル化の観点から捉え直す「日本ポップ・カルチャー論」が置かれ、専門的視点の掘り下げと複眼的視点の獲得を並行して進めることを可能にしている。

第2学年以降は学生自らが選択登録したコースとゼミの分野に関連する講義を中心に履修するが、第3学年を迎える前に自らの関心が発展的に変化した場合には、既述のとおりゼミ担当指導教員との相談を経て第3学年時にコース・ゼミ登録を変更し、それに沿った履修計画を再構築する。

これらの「講義」は、科目内容について専門的な研究業績を有する専任教員と非常勤教員が担当する。

#### 4) 実践研究

「実践研究」のうち「実践研究A」は第1学年4単位必修の「英語基礎演習」であり、国際コミュニケーションや情報収集に必須の英語力を高める。

「実践研究B」は第2学年から第4学年までの間に、「英語コミュニケーションコース」では12単位以上、「欧米文化コース」「アジア文化コース」では2単位以上を選択履修しなければならない。「英語コミュニケーションコース」では、「English Workshop & Camp」「English Workshop 2」を第2学年で、「English Workshop 3, 4」を第3学年で履修するよう指導する。また、「実践文化演習f」（カナダ語学研修）を必修として第2学年後期に履修する。以上で「English Workshop」が各2単位で計8単位、「実践文化演習f」が4単位で、合わせて12単位を満たすことになる。

「欧米文化コース」「アジア文化コース」では専攻分野と関心に応じて科目を自由に選択できる。

「実践研究C」は第2学年から第4学年までの間に、「英語コミュニケーションコース」では8単位以上、「欧米文化コース」「アジア文化コース」では6単位以上を選択履修しなければならない。「英語コミュニケーションコース」では、第2学年に「Pop Culture in English 1,2」を履修して英語学習への関心を高め、第3学年で「World News」「Global Communication」「Teaching English to Children 1,2」を履修することで、さらに実践的な英語力を伸ばすよう指導する。各2単位のため、すべて履修すると12単位となるが、第3学年時にビジネス英語か英語教育かという学生自身のキャリアを見据えた選択に基づき、「World News」「Global Communication」のみを履修、あるいは「Teaching English to Children 1,2」のみを履修して計8単位とすることも可能である。「欧米文化コース」「アジア文化コース」では、第2学年に身体表現を通じて文字通り異文化を体感できる「表現文化演習1・2」や、歌を題材に英語力を鍛え関心を高める「Pop Culture in English 1,2」の履修を勧める。そして第3学年には、入学から2年間で高めた語学力を基に、外国語で文化への理解を深める「言語文化演習1・2」の履修を推奨している。西洋史に関心のある学生であれば「西洋史文献を読む1,2」を履修してもよい。これら16単位の科目から6単位以上を選択し、第2、第3学年の各セメスターでバランスよく履修することを学生に推奨する。

以上、学生は学科専門科目に関して、「英語コミュニケーションコース」の場合は、必修の「演習」「概論」「実践研究A」「実践研究B」「実践研究C」計44単位、選択の「講義」18単位以上を履修しなければならない。「欧米文化コース」「アジア文化コース」の場合は、必修の「演習」「概論」

「実践研究A」「実践研究B」「実践研究C」計32単位、選択の「講義」26単位以上を履修しなければならない。これらの学修を通じて、学生は自ら関心を持った題材を主体的に探究し的確な言語で表現する醍醐味を知り、それを実践するための知識と力を身につける。そして第4学年時に「卒業研究」に取り組む中で、それらを総合的に探究実践にいかす力を身につける。卒業研究を提出し、口述試問審査に合格すれば、卒業所要の8単位が認定される。以上の学科専門科目単位に加

えて、「英語コミュニケーションコース」の場合は共通基礎科目（必修）30単位、「欧米文化コース」「アジア文化コース」の場合は、共通基礎科目（必修）24単位を修得し、自己選択科目・現代総合科目を含めて124単位以上の取得で、卒業要件を充たすことになる。

#### <主要科目の想定履修者数と教員体制>

- ・概論（50人×2クラス＝100人） 教員6～7人が担当  
|
- ・国際文化演習Ⅰクラス<教員4人／ Semester> 通年で教員8人が携わる。  
国際文化演習Ⅰ(25人×4クラス＝100人)  
|
- ・国際文化演習Ⅱ～Ⅳ（ゼミ）：平均14～15人×7ゼミ＝100人  
|

実践研究A：「英語基礎演習」：20人×5クラス＝100人

実践研究B：のべ人数120人、実人数100人\*

「English Workshop」：英語コミュ所属20人+5人

「実践文化演習a」（フィールドワーク）20人

「実践文化演習b～e」（語学集中）40人

「実践文化演習f」（カナダ語学研修）：英語コミュ所属20人+5人

「実践文化演習g～l」（海外研修）10人

\*「英語コミュニケーションコース」（定員20名弱、以下「英コミュ」）では「English Workshop」と「実践文化演習f」の両方が必修なので、のべ人数ではその分が重複している。

実践研究C：

（第2学年）計100人

「Pop Culture in English 1・2」英語コミュ所属20人+20人

「表現文化演習1・2」40人

「西洋史文献を読む1・2」20人

（第3学年）のべ人数120人、実人数100人

「World News」「Global Communication」英語コミュ所属20人+10人

「Teaching English to Children 1・2」英語コミュ所属20人+10人

「言語文化演習1・2」（英語）20人

「言語文化演習1・2」（外国語）40人

### （3）学年・学期進行と科目配当

学年・Semester毎の科目配当の考え方と必修科目と選択科目の配当設計を以下に記した。初期は必修科目の比重が多く、履修が進むにつれて、選択科目の比重が増すかたちになっている。各Semesterの履修可能単位数上限は24であるが、どのコース・分野を選んだ学生もSemester毎にある程度バランス良く段階的に履修ができるように設計している。なお、学生の関心や第2学年で選択するコースに応じて優先的に履修すべき科目の年次は前後するため、以下の配当では

同一科目が別の学年に重複して現れることがある。

## 1) 第1学年前期

以降の履修に必要な基礎知識を学科学生全員に身につけさせるべく、大学共通必修の共通基礎科目と学科の必修科目をそれぞれ4科目(8単位)、3科目(6単位)と多く配している。履修単位の上限を24単位とするので、選択外国語と学科専門科目(講義)と現代総合科目から、学生は10単位以内の範囲で選択履修できる。「英語コミュニケーションコース」志望者、または英語力向上を目指す学生には、選択外国語から「英語読解(中級)」か「英語読解(上級)」のいずれかと「英語会話(中級)」の履修を強く推奨し、それ以外の学生には初修外国語の初級科目の履修を強く推奨する。また、第2学年に「実践文化演習a」(フィールドラーニング)の履修を希望する学生には、学科専門科目(講義)の「グローバル・ボランティア論」を履修するよう強く推奨する。

(大学共通必修) 人間学Ⅰ、学びの発見、英語Ⅰ、初修外国語Ⅰ・・・4科目(8単位)

(学科必修) 国際文化演習Ⅰ、国際文化概論、英語基礎演習・・・3科目(6単位)

(学科選択:講義) グローバル・ボランティア論、ヨーロッパの文化1、英米の文化3、英米の文化5、英語学概論1、英文学概論1、比較文化講義1、東アジアの文化1・・・8科目(16単位)  
を留意

(選択外国語) 英語読解(中級)1、英語読解(上級)3、英語会話(中級)1、ドイツ語のしくみと表現(初級)1、ドイツ語読解(初級)1、ドイツ語会話(初級)1、フランス語のしくみと表現(初級)、フランス語会話(初級)、中国語読解(初級)1、中国語会話(初級)1または3、中国語のしくみと表現(初級)1、韓国・朝鮮語会話(初級)1、韓国語のしくみと表現(初級)1・・・13科目(14単位)等を留意

## 2) 第1学年後期

前期に引き続き、大学共通と学科の必修科目をそれぞれ3科目(6単位)、3科目(6単位)と多く配している。履修単位の上限を24単位とするので、学生は選択外国語と学科専門科目(講義)と現代総合科目から12単位以内の範囲で選択履修できる。「英語コミュニケーションコース」を志望、または英語力向上を目指す学生には、選択外国語から「英語読解(中級)」か「英語読解(上級)」のいずれかと「英語会話(中級)」の履修を強く推奨し、それ以外の学生には初修外国語の初級科目の履修を強く推奨する。

(大学共通必修) 人間学Ⅰ、英語Ⅰ、初修外国語Ⅰ・・・3科目(6単位)

(学科必修) 国際文化演習Ⅰ、国際言語概論、英語基礎演習・・・3科目(6単位)

(選択外国語) 英語読解(中級)2、英語読解(上級)4、英語会話(中級)2、ドイツ語のしくみと表現(初級)2、ドイツ語読解(初級)2、ドイツ語会話(初級)2、フランス語読解(初級)、中国語読解(初級)2、中国語会話(初級)2または4、中国語のしくみと表現(初級)2、韓国・朝鮮語会話(初級)2、韓国語のしくみと表現(初級)2・・・12科目(12単位)等を留意

(学科選択：講義) ヨーロッパの文化 2、英米の文化 4、英語学概論 2、英文学概論 2、比較文化講義 2、東アジアの文化 2・・・6 科目 (12 単位) 等を用意

### 3) 第 2 学年前期

学年が上がるにつれ、大学共通と学科の必修科目の割合は減る。本期は 3 科目 (6 単位) が全コース共通で必修である。第 2 学年はじめに、学生は 3 つのコースから一つを選び、演習 (ゼミ) も選択する。ゼミ指導教員と探究の方向性について相談し、それぞれに必要な知識を身につけるための履修計画を定める。「英語コミュニケーションコース」を選択した学生は英語集中プログラムに沿って選択外国語「インテンシブ英会話 (中級)」、実践研究「English Workshop & Camp」「Pop Culture in English」の 3 科目 (8 単位) を履修し、履修単位制限 24 単位以内のうち 14 単位を除いた 10 単位分を選択外国語、学科専門科目の講義、実践研究等から履修できる。「欧米文化コース」「アジア文化コース」を選択した学生は、履修単位制限 24 単位以内のうち必修 6 単位を除いた 18 単位分を選択外国語、学科専門科目の講義、実践研究等から履修できるが、選択外国語から初修外国語の中級科目の履修を強く推奨する。

(大学共通必修) 人間学Ⅱ、外国語Ⅱ・・・2 科目 (4 単位)

(学科必修) 国際文化演習Ⅱ・・・1 科目 (2 単位)

(選択外国語) インテンシブ英会話 (中級) 1、英語読解 (中級) 3、英語会話 (中級) 1、ドイツ語読解 (中級) 1、フランス語会話 (中級)、中国語会話 (中級) 1、韓国・朝鮮語会話 (中級) 1・・・7 科目 (7 単位) 等を用意

(学科選択：講義) 京都の歴史と文化、英米の文化 5、英語のしくみ 1、イギリス文学講義 1、西洋史講義 1・・・5 科目 (10 単位) 等を用意

(学科選択：実践研究) English Workshop & Camp、Pop Culture in English 1、表現文化演習 1・・・3 科目 (6 単位) 等を用意

### 4) 第 2 学年後期

本期も 3 科目 (6 単位) が全コース共通で必修である。「英語コミュニケーションコース」を選択した学生は選択外国語「インテンシブ英会話 (中級)」、実践研究「English Workshop 2」「Pop Culture in English 2」の 3 科目 (8 単位) に加え、「実践文化演習 f」(カナダ語学研修、4 単位) を履修するため、履修単位制限 24 単位以内のうち必修 18 単位を除いた 6 単位分を選択外国語、学科専門科目の講義、実践研究等から履修できる。「欧米文化コース」「アジア文化コース」を選択した学生は、「実践文化演習 a～1」および「English Workshop」のうちいずれか 1 科目 2 単位を選択必修とし、履修単位制限 24 単位以内のうち必修 8 単位を除いた 16 単位分を選択外国語、学科専門科目の講義、実践研究等から履修できるが、選択外国語から初修外国語の中級科目の履修を強く推奨する。

(大学共通必修) 人間学Ⅱ、外国語Ⅱ・・・2 科目 (4 単位)

(学科必修) 国際文化演習Ⅱ・・・1 科目 (2 単位)

(選択外国語) インテンシブ英会話 (中級) 2、英語読解 (中級) 4、英語会話 (中級) 2、ドイ

ソ語読解（中級）2、フランス語読解（中級）、中国語会話（中級）2、韓国・朝鮮語読解（中級）・・・7科目（10単位）等を用意

（学科選択：講義）世界の宗教と文化、英米の文化6、英語のしくみ2、ヨーロッパの文化2、イギリス文学講義2、西洋史講義2、現代朝鮮半島事情・・・7科目（14単位）以上を用意

（学科選択：実践研究）English Workshop 2、Pop Culture in English 2、表現文化演習2、実践文化演習a～1・・・15科目（38単位）等を用意

### 5) 第3学年前期

第3学年前後期では、必修の「国際文化演習Ⅲ（ゼミ）」を拠点として主体的学修の遂行力を養う。学生は自ら問いを立てて研究テーマを定め、他の学生や指導教員の助言を受けながら遂行した資料収集・検証・考察の成果をゼミで報告する。報告に対するゼミでの講評や問題点の指摘を受けて、主体的学修を支える論理的思考力と表現力の向上を図る。

（学科必修） 国際文化演習Ⅲ・・・1科目（2単位）

（選択外国語） 英語会話（中級）3、英作文（中級）1、フランス語のしくみと表現（中級）、中国語会話（上級）1、韓国・朝鮮語読解（上級）・・・5科目（5単位）等を用意

（学科選択：講義）比較文化講義1、英米の文化1、アメリカ文学講義1、ドイツ文学講義1または2（隔年）、越境するアジアの文化1または2（隔年）、キリスト教学1、国際関係論1・・・7科目（14単位）等を用意

（学科選択：実践研究）English Workshop 3、World News、Teaching English to Children 1、言語文化演習1（英語／ドイツ語／フランス語／中国語／韓国・朝鮮語）・・・8科目（16単位）等を用意

### 6) 第3学年後期

前期に引き続き、必修ゼミ「国際文化演習Ⅲ」を拠点として国際文化研究の主体的学修実践を進める。

（学科必修） 国際文化演習Ⅲ・・・1科目（2単位）

（選択外国語） 英語会話（中級）4、英作文（中級）2、中国語会話（上級）2・・・3科目（3単位）等を用意

（学科選択：講義）比較文化講義2、英米の文化2、アメリカ文学講義2、フランス文学講義1または2（隔年）、国際文化特殊講義1～4、日本ポップカルチャー論、キリスト教学2、国際関係論2・・・11科目（22単位）等を用意

（学科選択：実践研究）English Workshop 4、Global Communication、Teaching English to Children 2、言語文化演習2（英語／ドイツ語／フランス語／中国語／韓国・朝鮮語）・・・8科目（16単位）以上を用意

### 7) 第4学年前期

最終年度、学生は大学生生活の集大成たる「卒業研究」に取り組む。必修の「国際文化演習Ⅳ」でその取り組みをサポートする。

(学科必修) 国際文化演習Ⅳ・・・1科目 (2単位)

(学科選択：講義) ドイツ文学講義 1 または 2 (隔年)・・・1科目 (2単位)

(学科選択：実践研究) 西洋史文献を読む 1・・・1科目 (2単位)

## 8) 第4学年後期

前期に引き続き、必修の「国際文化演習Ⅳ」で「卒業研究」の取り組みをサポートする。

(学科必修) 国際文化演習Ⅳ、卒業研究・・・1科目 (2単位) +8単位

(学科選択：講義) フランス文学講義 1 または 2 (隔年)、国際文化特殊講義 3～6  
・・・5科目 (10単位)

### (4) 履修モデル

上述した Semester 毎の配当開講科目の中から、学生は科目を履修するが、系統的かつ主体的な履修が円滑に行われるよう、3つのコースに対応する以下のような履修モデルを提示し、学生の履修計画と教員の履修指導に資するようにする。履修モデルは、専攻する地域言語文化研究を遂行する上で求められる知識や能力の養成に資する科目群の組み合わせであり、以下にその一部を例示する【資料1 履修モデル】。

1) 「英語コミュニケーションコース」を志望し、実践的な英語力を鍛えて将来的に英語を活かした仕事がしたいと願う学生への履修モデル

1年前期：総合科目・大学導入・必修外国語・演習Ⅰ・概論・実践研究の必修 14 単位、選択外国語から英語会話（中級）1・英語読解（中級）1または英語読解（上級）3、講義から 4 単位、現代総合科目 2 単位 計 22 単位履修

1年後期：総合科目・必修外国語・演習Ⅰ・概論・実践研究の必修 12 単位、選択外国語から英語会話（中級）2・英語読解（中級）2または英語読解（上級）4、講義から 2 単位、現代総合科目 2 単位 計 18 単位履修 【第1学年合計 40 単位履修】

2年前期：総合科目・必修外国語・演習Ⅱの必修 10 単位、選択外国語インテンシブ英会話（中級）1、実践研究から English Workshop & Camp、Pop Culture in English 1、講義から京都の歴史と文化を含め 4 単位、現代総合科目 2 単位 計 20 単位履修

2年後期：総合科目・必修外国語・演習Ⅱの必修 10 単位、選択外国語インテンシブ英会話（中級）2、実践研究から実践文化演習 f、English Workshop 2、Pop Culture in English 2、講義から 4 単位 計 22 単位履修 【第2学年合計 42 単位履修】

3年前期：演習Ⅲ 2 単位、選択外国語から英作文（中級）1、英語会話（中級）3、実践研究から English Workshop 3 を含め 4 単位、講義から 2 単位、現代総合科目 4 単位 計 14 単位履修

3年後期：演習Ⅲ 2 単位、選択外国語から英作文（中級）2、英語会話（中級）4、実践研究から English Workshop 4、を含め 4 単位、講義から 2 単位、現代総合科目 2 単位 計 12 単位履修

【第3学年合計 26 単位履修】

4年前期：演習Ⅳ 2 単位、講義から 2 単位 計 4 単位履修

4年後期：演習Ⅳ 2 単位、講義から 2 単位、卒業研究 8 単位 計 12 単位履修 【第4学年合計 16 単位履修】

2) 「欧米文化コース」を志望し、ドイツおよびフランスを中心に西欧文化を深く学んで国際的に通じる教養とコミュニケーション力を身につけたいと願う学生への履修モデル

1年前期：総合科目・大学導入・必修外国語・演習Ⅰ・概論・実践研究の必修 14 単位、選択外国語の英語読解（中級）1・英語読解（上級）4・ドイツ語読解（初級）1・ドイツ語会話（初級）1・ドイツ語のしくみと表現（初級）1・フランス語会話（初級）・フランス語のしくみと表現（初級）の中から 1～2 単位、講義からグローバル・ボランティア論を含め 4 単位、現代総合科目 2 単位 計 21～22 単位履修

1年後期：総合科目・必修外国語・演習Ⅰ・概論・実践研究の必修 12 単位、選択外国語の英語読解（中級）2・英語読解（上級）4・ドイツ語読解（初級）2・ドイツ語会話（初級）2・ドイツ語のしくみと表現（初級）2、フランス語読解（初級）の中から 1 単位、講義から 2 単位、現代総合科目 2 単位 計 17 単位履修 【第1学年合計 38 から 39 単位履修】

2年前期：総合科目・必修外国語・演習Ⅱの必修 6 単位、選択外国語の英語読解（中級）3・英語会話（中級）1・ドイツ語読解（中級）1、フランス語会話（中級）の中から 1 単位、講義から 4 単位、実践研究(B)2 単位、実践研究(C)2 単位、現代総合科目 4 単位 計 19 単位履修

2年後期：総合科目・必修外国語・演習Ⅱの必修 6 単位、英語読解（中級）4・英語会話（中級）2・ドイツ語読解（中級）2、フランス語読解（中級）の中から 1 単位、講義から世界の宗教と文化を含め 4 単位、実践研究(B)2 単位、実践研究(C)2 単位、現代総合科目 4 単位 計 19 単位履修 【第2学年合計 38 単位履修】

3年前期：演習Ⅲ 2 単位、選択外国語の英語会話（中級）3・英作文（中級）1・フランス語のしくみと表現（中級）から 1 単位、講義から 4 単位、実践研究(B)2 単位、実践研究(C)2 単位、現代総合科目 4 単位 計 15 単位履修

3年後期：演習Ⅲ 2 単位、選択外国語の英語会話（中級）4・英作文（中級）の中から 0～1 単位、講義から日本ポップカルチャー論を含め 8 単位、実践研究(B)2 単位、実践研究(C)2 単位、計 14～15 単位履修 【第3学年合計 29～30 単位履修】

4年前期：演習Ⅳ 2 単位、実践研究から 2 単位、現代総合科目 2 単位 計 6 単位履修

4年後期：演習Ⅳ 2 単位、講義から 2 単位、卒業研究 8 単位 計 12 単位履修 【第4学年合計 18 単位履修】

3)「現代アジアコース」を志望し、中国語と中国文化を学ぶ傍ら英語力にも磨きをかけ、将来的に旅行業や商社など国境を越えて活躍できる仕事につくことを希望する学生への履修モデル

1年前期：総合科目・大学導入・必修外国語・演習Ⅰ・概論・実践研究の必修14単位、選択外国語の中国語読解（初級）1・中国語会話（初級）1または3・韓国・朝鮮語会話（初級）1の中から1単位、中国語のしくみと表現（初級）1または韓国語のしくみと表現（初級）1の中から1単位、講義からグローバル・ボランティア論・東アジアの文化1の2科目4単位、現代総合科目2単位 計22単位履修

1年後期：総合科目・必修外国語・演習Ⅰ・概論・実践研究の必修12単位、選択外国語の中国語読解（初級）2・中国語会話（初級）2または4・韓国・朝鮮語会話（初級）2の中から1単位、中国語のしくみと表現（初級）2または韓国語のしくみと表現（初級）2の中から1単位、講義から東アジアの文化2 1科目2単位、現代総合科目4単位 計20単位履修 【第1学年合計42単位履修】

2年前期：総合科目・必修外国語・演習Ⅱの必修6単位、選択外国語の中国語会話（中級）1または韓国・朝鮮語会話（中級）の中から1単位、講義から京都の歴史と文化 1科目2単位、実践研究（B）2単位、実践研究（C）2単位、現代総合科目4単位 計17単位履修

2年後期：総合科目・必修外国語・演習Ⅱの必修6単位、選択外国語から1単位、講義から世界の宗教と文化・現代朝鮮半島事情の2科目4単位、実践研究（B）2単位、実践研究（C）2単位、現代総合科目4単位 計19単位履修 【第2学年合計36単位履修】

3年前期：演習Ⅲ 2単位、選択外国語の中国語会話（上級）1または韓国・朝鮮語読解（上級）の中から1単位、講義から国際関係論1または比較文化講義1、越境するアジアの文化1または2から各2単位、実践研究（C）2単位、現代総合科目4単位 計13単位履修

3年後期：演習Ⅲ 2単位、選択外国語から1単位、講義から国際関係論2または比較文化講義2、から1科目、国際文化特殊講義3、国際文化特殊講義4、日本ポップカルチャー論の計4科目8単位、実践研究（C）2単位、現代総合科目4単位 計17単位履修 【第3学年合計30単位履修】

4年前期：演習Ⅳ 2単位 計2単位履修

4年後期：演習Ⅳ 2単位、講義から国際文化特殊講義5・6の2科目4単位、卒業研究8単位 計14単位履修 【第4学年合計16単位履修】

## ⑦ 施設、設備等の整備計画

国際学部の設置については、大学全体の入学定員・収容定員を増員し、既存の文学部国際文化

学科を発展的に改組することを計画の骨子としている。そのため国際学部にかかる校地、運動場及び校舎等の施設については、既存学部・学科に置いて整備している教室・演習室、教員研究室、研究室（自習室）等を利用し、既設の学部・学科及び併設の大谷大学短期大学部の教育課程・環境に支障をきたすことなく共同で使用する予定である。

## ア 校地、運動場の整備計画

本学の本部キャンパスの校地は 43,240.09 m<sup>2</sup>で、京都市内の北部、京都市営地下鉄北大路駅徒歩 3 分の交通至便な位置に立地している。教育研究活動は、すべて本部キャンパスにおいて実施している。

運動場、体育施設やセミナーハウスがある湖西キャンパスは滋賀県大津市に所在し、公共交通機関を用いて約 50 分の距離にある。本部キャンパスと湖西キャンパスを結ぶスクールバスを運行しており、主に課外活動やセミナーハウスでゼミ合宿を行う学生たちが利用している。運動場は、湖西キャンパスには 21,167.38 m<sup>2</sup>のグラウンドとサブグラウンドを有し、本部キャンパスには 2,488.10 m<sup>2</sup>のグラウンドと 3 階建て延べ床面積 4,857.06 m<sup>2</sup>の体育館を有している。

## イ 校舎等施設の整備計画

本部キャンパスには、1号館、2号館、4号館、5号館、尋源館（じんげんかん）、博綜館（はくそうかん）、響流館（こうりかん）、及び 2018 年 3 月に竣工した新教室棟「慶聞館（きょうもんかん）」の 8 つの校舎を設置している。

国際学部の校舎については、冒頭のとおり教育課程・環境に支障をきたすことなく共同で使用する予定であり、大学設置基準に規定される収容定員あたりの校舎面積「16,103.00 m<sup>2</sup>」に対して本学の校舎面積は「53,597.58 m<sup>2</sup>」となっていることから、十分に整備されている。

特に、新教室棟「慶聞館」には、多くの学生たちが集う広大な「学生ロビー」を設置し、正課授業以外で利用できるアクティブ・ラーニングスペースである「マルチスペース」やベンチ、ウッドデッキ等を建物屋内外の各所に設けており、学生・教職員の交流をはじめ、大学で実現する多様な学びを目的に応じて利用できる開放的なスペースを十分に確保している。

慶聞館の 1 階中央部には、学生ロビーの周囲に学修支援施設（学習支援室、語学学習支援室、文藝塾）と学生支援部事務室（教務課、学生支援課、キャリアセンター）を配置している。

この学生ロビーを学修活動の起点として、2 階～5 階の教室フロアに各フロア 3 ヶ所ずつ設けられたアクティブ・ラーニングスペースである「マルチスペース」や、4・5 階の教員の個人研究室へスムーズにアクセスできるように有機的に配置している。また、館内全体には無線 LAN も整備し、PCをはじめスマートフォンやタブレットなどさまざまなデバイスが接続できる環境を整備している。

各教室は、大・中規模の講義教室だけでなく、ゼミやグループワークに対応できる小規模教室

を多く配置し、全教室にプロジェクタを完備している。さらに教室内に複数のプロジェクタを設置し、グループワークや遠隔地の状況を教室内に投影できる自由な学習空間の創出を可能とした高機能教室「セミナールーム」や「ディスカッションルーム」も設け、アクティブ・ラーニングの取組にも対応が可能となっている。

また、新教室棟「慶聞館」4階と総合研究室、図書館・博物館等を配置する研究系施設「響流館（こうりゅうかん）」を連結ブリッジにより接続したことで、教育・研究活動の接続性が向上している。こうした機能と配置により、学生たちの主体的な学びが可能となる【資料2 慶聞館パンフレット（抜粋）】。

以上のように、新教室棟「慶聞館」や「響流館」の諸施設と配置は、国際学部のカリキュラムにおいて重視するグローバルな世界とローカルな地域社会を結びつける「グローカル」な視点に立ち、異文化という鏡で自文化を見直しながら、多様な文化の豊かさを人生の豊かさにつなげる方法を探究し、幅広い視野と柔軟な思考力を培い、国際コミュニケーション力を養うために学生が主体的に学ぶことが出来る新しい環境づくりに対応した学修環境の創出を目指している。

## ⑧ 入学者選抜の概要

### 1. 国際学部のアドミッション・ポリシー（AP）

グローバル社会において、建学の精神に基づいて自己のアイデンティティを確立し、多様な他者の存在に気づき、寄りそうことのできる人物をめざす方を受け入れるために、下記のアドミッション・ポリシーを定める。

## 【国際学部 学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー）】

### 大谷大学（国際学部） 学生の受け入れ方針

#### 【教育目標（人物養成上の目的）】

国際学部は、グローバル社会において、建学の精神に基づいて自己のアイデンティティを確立し、多様な他者の存在に気づき、寄り添うことのできる人物の養成をめざす。

#### 【学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー AP）と入学制度】

教育目標を達成するために、国際学部で求めているのは、次のような人である。  
 (AP1) 高等学校で履修する国語、地歴・公民、数学、外国語などについて、高等学校卒業相当の知識をもつ。〔知識・理解〕  
 (AP2) 国際的・文化的事象について資料をもとに考察し、自分の考えをまとめることができる。〔思考・判断〕  
 (AP3) 世界の文化、言語、歴史について明確な関心を持ち、複数の外国語を学習する意欲と、異文化を理解し他者と共生しようとする意欲をもつ。〔関心・意欲〕  
 (AP4) 日本語を使用して、自分の考えを的確に表現することができる。〔技能・表現〕

入学制度	選考方法	(AP1)	(AP2)	(AP3)	(AP4)	各入学制度のねらい
アドミッション・オフィス入試 【総合型選抜】	エントリーシート		○	◎	○	本学の教育理念をよく理解し、本学で学ぶことに強い意欲と能力をもった学生を、学科の求める人物像との適合性を重視して受け入れる。 (小論文、プレゼンテーション、面接による試験。)
	小論文		○	○	◎	
	プレゼンテーション		◎	○	◎	
	面接		○	◎	○	
公募制推薦入試 A方式（小論文型） 【学校推薦型選抜】	小論文	○	○		◎	本学の教育理念をよく理解し、内発的な関心から思索しようとする個性豊かな学生を、出身中学校長の推薦に基づいて広く受け入れる。（小論文型：小論文による試験。2教科型：マークシート方式の教科試験。）
公募制推薦入試 B方式（2教科型） 【学校推薦型選抜】	教科	◎				
指定校制推薦入学制度 【学校推薦型選抜】	小論文	○	○		◎	本学の教育理念をよく理解し、内発的な関心から思索しようとする個性豊かな学生を、本学から依頼した高等学校または中等教育学校の学校長の推薦に基づいて受け入れる。
	面接		○	◎	○	
一般入試【第1期】 【第2期】	教科					高等学校で履修する科目について、高等学校卒業相当の知識をもつ学生を受け入れる。（一般入試【第1期】【第2期】：マークシート方式の教科試験。一般入試【大学入学共通テスト利用入試】：大学入学共通テストを利用したマークシート方式の教科試験。）
一般入試 【大学入学共通テスト利用入試】前期・後期	教科	◎				

#### 【国際学部の学生の受け入れ方針（アドミッション・ポリシー AP）】

- AP1 高等学校で履修する国語、地歴・公民、数学、外国語などについて、高等学校卒業相当の知識をもつ人
- AP2 国際的・文化的事象について資料をもとに考察し、自分の考えをまとめることができる人
- AP3 世界の文化、言語、歴史について明確な関心を持ち、複数の外国語を学習する意欲と、異文化を理解し他者と共生しようとする意欲をもつ人
- AP4 日本語を使用して、自分の考えを的確に表現することができる人

## 2. 入学者選抜の種類

本学部の入学者選抜は、総合型選抜、学校推薦型選抜、一般選抜（大学入学共通テスト利用入試を含む）を実施する。

なお、出願資格については、本学部で学ぶことに強い意欲を持ち、

- 1) 高等学校若しくは中等教育学校を卒業した者、又は卒業見込みの者。
- 2) 通常の課程による12年の学校教育を修了した者、又は修了見込みの者。
- 3) 学校教育法施行規則第150条により、高等学校を卒業した者と同等以上の学力があると認められる者、又はこれに該当する見込みの者。

のいずれかに該当する者としている。

### (1) 総合型選抜

総合型選抜として、AO入試を設ける。主にAP2～4を重視する専願制として実施する。選抜にあたっては、学力の3要素を多面的・総合的に評価することを企図し、以下の通り選考する。

- ア. セミナーを開催し、学長による本学の理念説明及び学部によるアドミッション・ポリシーの説明と講義を聴講してもらう。講義内容をもとにした所定の課題について論述する小論文を課す。
- イ. 出願時に提出された調査書、エントリーシート、自己PRのための書類（「活動報告書」や資格取得結果など）及びアの小論文を審査し、第1次合格者を決定する。
- ウ. 第1次合格者を対象にセミナーを開催する。本学部では課題、プレゼンテーションに取り組んでもらい、評価を行う。
- エ. ウのセミナー終了後、面接を行う。ウのセミナーでの評価及び面接により総合的に合否判定を行う。

### (2) 学校推薦型選抜

学校推薦型選抜として、公募制推薦入試と指定校制推薦入学制度を設ける。

併願制である公募制推薦入試の選考について、B方式（英語・国語の2教科型）ではAP1を、A方式（小論文型）ではAP4を重視し、以下の通り選考する。

- ア. 出身学校における成績（出身学校調査書の「全体の学習成績の状況」を10倍して50点満点に換算）と、本学で行う選考試験の成績（2教科型・小論文型ともに200点満点）との総合評価による（合計250点満点）。

専願制である指定校制推薦入学制度の選考については、主にAP1～4を総合的に考慮し、以下の通り選考する。

- ア. 本学との間で教育目標をめぐって相互理解を深め緊密な信頼関係が維持できると確かめられた高等学校の生徒で、本学及び学科が定める推薦条件の全ての項目に合致し学校長が推薦する者のみ出願可。
- イ. 事前に送付する課題図書を読了した上で所定の課題について論述する小論文と提出書類・面接評価との総合評価による。

### (3) 一般選抜

一般選抜として、一般入試 [第1期] [第2期]、一般入試 [大学入学共通テスト利用入試] 前期、後期を設ける。

一般入試においては AP1 を重視し、1 期、2 期と 2 回に分けて実施する。それぞれの試験は、

以下の試験科目を予定している。

○一般入試〔第1期〕

3教科型：国語、英語と地歴・公民、数学の中から1科目を選択

2教科型：国語、英語

○一般入試〔第2期〕

2教科型：国語、英語

大学入学共通テスト利用入試においては AP1 を重視し、前期、後期の 2 回に分けて実施する。大学入試センターが実施する大学入学共通テストの試験結果を利用して判定し、本学独自の試験は課さない。それぞれの試験は、以下の試験科目を予定している。

○一般入試〔大学入学共通テスト利用入試〕前期

3教科型：国語、外国語と地歴・公民、数学の中から1科目を選択

2教科型：国語、外国語

○〔大学入学共通テスト利用入試〕後期

2教科型：国語、外国語

なお、入試区分別の入学者数は、おおむね以下のとおりとする予定である。

・入学定員：100名

総合型選抜：14名（AO入試）

学校推薦型選抜：39名（公募制 A9人、B14人、指定校16名）

一般選抜：40名（1期3教科18人・2教科13人・2期9人）

一般選抜（大学入学共通テスト利用入試）：7人（前期3教科3人、2教科2人・後期2人）

## ⑨ 取得可能な資格

国際学部国際文化学科において取得可能な資格は以下のとおりである。

取得可能な資格	種類	資格取得／ 受験資格	備考
中学校教諭 1 種免許状（英語）	国家資格	資格取得	諸課程科目（卒業要件外）の履修が必要。資格取得が卒業要件ではない。
高等学校教諭 1 種免許状（英語）	国家資格	資格取得	諸課程科目（卒業要件外）の履修が必要。資格取得が卒業要件ではない。
図書館司書	国家資格	資格取得	諸課程科目（卒業要件外）の履修が必要。資格取得が卒業要件ではない。
真宗大谷派教師資格	民間資格	資格取得	諸課程科目（卒業要件外）の履修が必要。資格取得が卒業要件ではない。

## ⑩ 実習の具体的計画

国際学部国際文化学科において取得できる中学校教諭一種免許状（英語）、高等学校教諭一種免許状（英語）の取得に関する教育実習の具体的な計画は、以下のとおりである。

### ア 実習先の確保の状況

中等科教育実習の受け入れ先については、下記に示すとおりである。

#### ○京都府教育委員会

- ・府立中学校 4校
- ・府立高等学校 50校

#### ○京都市教育委員会

- ・市立中学校 73校
- ・市立高等学校 9校

- 私立中学校 3校
- 私立高等学校 8校

大学から上記の各校に対し、すでに実習生の受け入れ依頼を行い、承諾を得ている（【資料3 教育実習受入承諾書（中・高）】、【資料4 教育実習受入先一覧（中・高）】）。

## イ 実習先との契約内容

教育実習受け入れに関して、京都市立学校については「京都市教員養成連絡協議会」が実習生調整を行っている。「京都市教員養成連絡協議会」は「京都市教育委員会」と「京都地区大学教職課程協議会」と「京都市立学校校長会」の3者から成り立っているが、本学は「京都地区大学教職課程協議会」に加盟し、実習生の受け入れ依頼を行っている。その他の公立学校については、各自自治体の受け入れ方針にしたがう。また、真宗大谷派学校連合会加盟校を中心に私立学校にも実習生の受け入れ依頼を行っており、依頼にあたっては各校の受け入れ方針に従う。

中学校・高等学校ともに本学の実習方針を厳格に運用し、充実した実習が行えるように推進する。また実習校からの要望を実習に反映できるように、協力体制を築く。

## ウ 実習水準の確保

教育実習にあたっては、事前指導を綿密に行い、実習へ向けての心構えはもちろん、授業方法や生徒とのかかわりについて十全な理解を得ていることを前提としている。事前指導は実習指導担当教員が行うが、実習中は各学生の指導教員が指導にあたり、全学で一人ひとりの実習をサポートできる体制を作る。教育実習担当教員は、いずれも現場経験や現場に関する多くの知見を有する教員を配する。また本学教職支援センターでは、教職アドバイザー等を常駐させ、学生が相談できるような体制をとる。実習前には判定会議を行い、一人ひとりの学生が教育実習を履修する資格（最低修得単位の履修、教育実習事前指導の受講の有無など）があるかどうかを審議する。

## エ 実習先との連携体制

教育実習については、実習前年度実施の京都市教育委員会説明会に実習予定学生が参加した上で、所定の期間中に実習希望校に学生が内諾交渉を実施する。実習校からの内諾を受けた後、実習参加要件を満たした学生については、実習年度に大学より依頼状を送付し承諾を得る。また、実習生は実習校との事前オリエンテーションに参加し、実習に臨む。実習期間初旬に実習生の指導教員より電話もしくは訪問で挨拶を行い、実習期間中も学生と連絡を取りながら、実習参観におもむき、中間指導を実施する。実習参観時は指導教員等からも実習状況を確認し、適宜指導をする。また、実習後にも必要に応じて実習生の状況を確認し、訪問を行うことがある。

## オ 実習前の準備状況（感染予防対策・保険等の加入状況）

### ●感染予防対策

平成19年度文部科学省からの通知にもとづき教育実習等の実習における麻疹免疫の有無の確認については、平成29年2月京都府医師会感染症対策委員会からの「看護系、介護系、医療系、

教育系等大学あるいは専門学校<sup>の</sup>学生実習に際してのワクチン接種に係る提言」に準拠し、①過去の罹患歴、②予防接種の2回接種、③抗体検査で陽性のいずれかが証明できた者について実習参加を認める。

### ●保険等の加入

本学在<sup>学</sup>学生共通で公益財団法人日本国際教育支援協会の「学生教育研究災害傷害保険」(学研災)ならびに東京海上日動火災保険株式会社の「学生総合保障制度」(個人賠償責任保険)に加入する。当該保険において学研災において正課中、学校行事中、学校施設外の課外活動中の急激かつ偶然な外来の事故による身体の傷害を被った場合、個人賠償責任保険において正課、学校行事、課外活動(実習を含む)およびその往復中における他人の身体に障害を負わせ、又は他人の財物を破損させたことに起因して被保険者が法律上の損害賠償責任を負った場合に保険金支払い対象となる。

### ●守秘義務の徹底

教育実習の参加にあたっては、実習中に知りえた業務上の秘密や個人情報について守秘義務が発生し、実習にかかわる内容をみだりに SNS で発信することや記録、データ等を許可なく実習校から持ち出すことがないよう、事前指導や教育実習参加に向けた学内説明会等において学生への指導を徹底している。

### ●実習の要件

- ・教育実習受講資格の合格基準

教育実習の履修にあたっては、教育実習前に開催される判定会議で合格することが求められる。

合格基準は①教育職員免許法施行規則第 66 条の 6 に定める全科目と単位数(11 単位)を修得済みであること。なお、実習教科が英語の場合は「英語読解(中級)」をはじめとする科目群より 4 単位以上を修得済みであること。②「教育の基礎的理解に関する科目等」のうち、「教育原論(中・高)」をはじめ、14 単位を修得済みであること。③「各教科の指導法」のうち、自身が実習を行う教科の指導法を 4 単位以上修得済みであること。④「教科に関する専門的事項」のうち、当該教科の「免許法施行規則に定める科目区分等」に掲げられた科目より、各 1 科目以上を含め、計 5 科目以上修得済みであること。⑤「大学が独自に設定する科目」のうち、2 単位以上を修得済みであること。⑥最終学年において卒業見込みであり、かつ免許取得見込みであること。⑦教職に就く強い熱意をもち、教員採用試験を受験すること。以上が教育実習履修の条件である。

### カ 事前・事後における指導計画

中等科教育における教育実習の実施に向けて、今日の学校の状況、中学校・高等学校教員に求められる資質について理解し、授業観察や児童の観察の視点、学習指導案の作成及び授業の実施上の留意点などについて理解する。実習校で知り得た情報・個人情報等にかかわる守秘義務についても理解し、意義ある教育実習が実施できるよう基本となる事項について習得する。また、服装や言葉遣い、実習記録のとり方、担当教員からの指導の受け方など、一般的な心構えについても理解を図る。

## 事前指導

- (1) 教育実習受講許可判定会議前の事前指導：教職課程部会委員等による全体指導
  - a 講義 … 「教育実習の意義（教師教育、目標、内容・方法）」、「来年度教育実習受講にあたっての心構えと準備」、「学校教育理解～組織、経営、生徒指導」
  - b 演習 … グループワーク、マナー講習等
  - c 教職に就く意志の確認
  
- (2) 教育実習許可発表後の事前指導  
現場経験の豊かな講師と本学教員による、教育実習受講にあたっての全体的指導（2時間）、実習にあたっての心構え・諸注意、授業の進め方等下記内容に関する講義・演習

## 事後指導

教育実習反省会を実施する。

### ①教育実習教科別反省会（2時間）

教職課程部会の各教科指導教員が担当し、教科毎で実習生全員が実習の様態を発表、意見交換を行う。特に実習中に学生が疑問に感じたことや困ったこと等について、ディスカッションを行うことにより、担当教員の指導のもと教員のあり方について考える。②本学教職課程担当教員による指導（4時間）

- ア. 教育実習教科別反省会を踏まえ、実習生への評価と総括
- イ. 課題解決へのアドバイス（演習）
- ウ. 教師のあり方と実際について（講義、ディスカッション等）
- エ. 個々の学生への指導のまとめ
- オ. 課題研究

## キ 教員及び助手の配置並びに巡回指導計画

実習中は本学部教員が実習校を巡回指導し、適切に実習が行われているかを確認し、指導を行う。遠隔地の実習校の場合は、電話での実習状況の確認を必ず行う。

## ク 実習施設における指導者の配置計画

学校教育法第 37 条の条件を満たしている実習先に教育実習生を送る。教育実習生指導教諭の配置を依頼する。本学との連携に関しては、教員・教職支援センターが、実習先の教育実習担当責任者と事前・実習中・事後の連絡を密に取り合う体制とする。

## ケ 成績評価体制及び単位認定方法

実習校の評定に加えて、事後レポート、実習日誌の内容を総合的に勘案し、資格取得課程委員会教職課程部会中等教育部門にて総合的に評価、決定する。

## コ その他特記事項

### ●実習に関わる学内組織・学外組織

## ＜学内組織＞

中学校教諭・高等学校教諭養成に関しては、本学「資格取得課程委員会」傘下の「教職課程部会中等教育部門」が担当する。当部会は、教職関連教員 20 名ほどで構成され、教育実習の実施計画が策定される。学生が教育実習を履修する年度の前年度より受講登録を行い、実習校との協議の上配当を行う。また実習に関わる学生指導を推進する。

## ＜学外組織＞

「京都市教員養成連絡協議会」に所属している。本協議会は、「京都市教育委員会」と「京都地区大学教職課程協議会」と「京都市立学校校長会」の三者から成り立っている。座長は京都市教育委員会京都市総合教育センター教員養成支援室長、副座長は京都地区大学教職課程協議会が推薦する者が 1 名と教育委員会が推薦する者が 1 名、委員は京都地区大学教職課程協議会が推薦する大学関係者が若干名と京都市教育委員会が推薦する教育委員会職員及び京都市立学校の校長が若干名である。

## ●実習時期と時間数

### 実習時期

中学校：第 4 学年次 5 月～11 月

高等学校：第 4 学年次 5 月～11 月

### 実習期間・総時間数

中学校 3～4 週間（120 時間）、いずれも実習校の実施計画に基づく。

高等学校 2 週間（60 時間）、いずれも実習校の実施計画に基づく。

## ●実習の目標と学修内容

- 1 学校教育活動全般及び学校施設・設備・環境等について注意深く観察し、学習指導要領の実践を理解する。具体的な観察事項は、学校運営及び学級運営にかかる全般的状況、学習指導、生活指導、特別活動等。（5 時間以上）
- 2 教育活動の一部に直接関わることによって補助的に教育活動を経験し、教壇実習への予備活動とする。例えば、指導教諭の下で、学習指導の部分的な担当（教材・教具・資料の作成や準備）、清掃指導、クラブ活動指導等。可能な限り学校運営の多くの事項に参加する。（10 時間以上）
- 3 指導教諭の下で教科指導の教壇実習（15 時間以上。うち研究授業 1 時間）、併せて実習校の諸先生方や他の実習生の授業も参観することで指導法を学ぶ。教科指導外の教育活動（ホームルームや道徳教育、クラブ活動等）に携わることで生徒指導力を磨く。（10 時間以上）

## ⑪ 企業実習(インターンシップを含む)や海外語学研修等の学外実習を実施する場合の具体的計画

### 海外研修プログラム

国際学部では、海外で日本と異なる文化を体験し、そこで生活している人々の多様な考え方に触れることにより、自らの文化を再認識し国際的な視野を深める機会として、「短期語学研修」や「短期文化研修」を「実践研究」科目群に開設する。

これらは、本学でおこなう事前授業と夏期休暇や春期休暇を利用して現地でおこなう研修授業を組み合わせるプログラムされている。「短期語学研修」は台湾、中国、韓国、カナダ等で、3週間程度、協定大学の現地大学教員による語学の授業を受講するほか、名所・史跡などを訪れる様々な実地研修も実施している。「短期文化研修」はインド、中国、ヨーロッパ地域等の国々の文化や宗教、歴史に様々な角度から直接触れることにより異文化理解を深められるよう企図している。

### ア 実習先の確保の状況

短期語学研修は、カナダ、中国、台湾、韓国の4大学と学術交流協定を締結し、その協定に基づいて実施されており、実習先の確保はできている。

#### <短期語学研修>

科目	研修先協定大学	所在地	受入人数
実践文化演習 f (カナダ語学研修)	トンプソン・リヴァース大学	カムループス	35人
実践文化演習 g (中国語学研修 1)	淡江大学	淡水	30人
実践文化演習 h (中国語学研修 2)	首都師範大学	北京	30人
実践文化演習 i (韓国語学研修)	慶熙大学校	ソウル	30人

短期文化研修は、ドイツ・フランス・インド・中国の4カ国を訪れ、2週間程度の実施研修を行うもので、大学や機関等の受け入れを前提とするものではない。

#### <短期文化研修>

科目	研修内容	受入人数
実践文化演習 j (ヨーロッパ文化研修)	フランス	20人
実践文化演習 j (ヨーロッパ文化研修)	ドイツ	20人
実践文化演習 k (インド文化研修)	インド仏教遺跡研修	30人
実践文化演習 l (中国文化研修)	中国仏教遺跡研修	20人

## イ 実習先との連携

科目ごとに本学専任教員を担当者とし、プログラムの事前調整や現地実習への引率を担当することにより、協定大学等との連携や意思の疎通を図っている。事務的な事項については、担当教員とともに教務課が学内における事前学習や渡航準備、協定大学事務局とのプログラム関連の連絡・調整を所管している。また緊急時の対応や海外におけるトラブル事例など海外渡航にともなう事前指導、学生・教職員の海外渡航中における危機管理を教育研究支援課が担当し、研修の運営と安全の確保に努めている。

## ウ 成績評価体制及び単位認定方法

上記の通り、4つの短期語学研修、4つの短期文化研修が設置され、本学での事前・事後学習、現地での授業・実習または現地研修を行うことで構成される。

単位認定のための成績評価については、事前・事後学習と現地での授業・実習または現地研修を設定し、現地での取り組みや事前・事後学習の取り組みを総合的に判断し成績評価をおこなう。具体的には、「短期語学研修」については、実習先大学から現地でのプログラム内容と時間数を記載した修了証明書の提出を受け、それに加え、事前・事後学習のレポートをもとに総合的に評価し、単位を認定する。「短期文化研修」については、事前・事後および現地の研修における発表や取り組み姿勢を平常点として評価し、小レポートや最終レポートをもとに成績を総合的に評価し、単位を認定する。

## 【短期語学研修】

### ○実践文化演習 f (カナダ語学研修)

カナダ (カムループス)・トンプソン・リヴァース大学

<授業テーマ>

研修先大学での英語研修及び現地の小学校訪問やボランティア活動などを通して、カナダの人たちと交流することにより、生きた英語の運用能力を高めるとともに、視野を広げ、国際感覚を養う。

<授業概要>

事前授業においてはカナダの地理・歴史や英語の基本的な表現を学び、カナダの子供たちに英語で日本文化を紹介するための準備を行う。現地の3週間の語学研修では、現地の教員による英語の授業、小学校訪問やボランティア活動、現地の学生たちとの交流に加え、スポーツその他の行事なども行う。

### ○実践文化演習 g (中国語学研修 1)

台湾 (淡水)・淡江大学

<授業テーマ>

中国語会話を実践的に使用しながら、現代華人社会の文化諸相を学ぶ。

<授業概要>

事前講義にて台湾や華人社会に関する基礎知識を学び、現地研修にて語学学習プログラムに参加するとともに、台湾の人々および諸外国からの留学生たちとコミュニ

ケーションをはかり、中国語会話を実践的に運用することができることを目指す。

### ○実践文化演習 h (中国語学研修2)

中国（北京）・首都師範大学

＜授業テーマ＞

生きた中国語を学び、中国文化に触れる。

＜授業概要＞

事前講義において、中国語会話を実践的に使用しながら、現代中国社会の文化諸相を学ぶ。現地研修（中国・首都師範大学）では、中国語をレベルアップするとともに、中国社会に対する見聞を拡げ、中国文化を体験する。

### ○実践文化演習 i (韓国語学研修)

韓国（ソウル）・慶熙大学校

＜授業テーマ＞

日本における事前講義を受講後、8月に韓国において現地の教員から韓国語と韓国文化を学ぶ。

＜授業概要＞

事前授業では、韓国での生活の心構え、韓国の文化や歴史について学び、生活するうえで必要な会話なども身につける。現地研修は、長期休暇の時期に、韓国の大学の語学堂で約3週間の研修をうける。語学堂での講習は、会話、聴解、読解を中心に授業が構成されており、別途、文化講義や遠足などにも参加する。そうした学びの過程を通じて、韓国・朝鮮語の力を伸ばすことと、韓国・朝鮮文化への理解を深めることを目指す。

## 【短期文化研修】

### ○実践文化演習 j (ヨーロッパ文化研修) フランス

＜授業テーマ＞

現地研修を通じて、フランスの生活文化と宗教を学ぶ。

＜授業概要＞

事前学習では、フランスの歴史・地理・文化・宗教についての基礎的な知識を学習するとともに、フランス語コミュニケーションの基礎を習得する。事後学習においては、フランス研修を振り返り、フランス文化と自文化の共通点や相違点について考察し、体験に基づく具体例を挙げながら発表を行い、レポートにまとめる。

### ○実践文化演習 j (ヨーロッパ文化研修) ドイツ

＜授業テーマ＞

ドイツ語圏における、文化、宗教、社会の諸相を学ぶ。

＜授業概要＞

国内での事前学習では、受講生が書籍やインターネットを使用して、研修地の情報

を収集し、パワーポイントを使用してそれについてプレゼンテーションをおこなう。現地研修では、事前学習で得た知識を現地で検証する。事後学習では、われわれが持つイメージや得られる情報が現実とどこまで対応し、あるいは乖離しているかを理解するために現地研修をふり返り、その成果をレポートにまとめる。

#### ○実践文化演習 k (インド文化研修)

<授業テーマ>

インドの宗教と文化を体験する。

<授業概要>

事前講義において、インドの歴史の概略と現代の状況、インドの諸宗教およびインド仏教の概略を学習し、宗教（特に仏教）を中心としたインドの歴史や文化について理解する。また現地研修においては、仏跡を中心にヒンドゥー教寺院やイスラム建築などを実際に訪れ、インド文化の多様性に肌で触れる。事後学習では、仏教を中心としたインドの宗教や文化について、現地での体験を踏まえて発表するとともに、レポートにまとめる。

#### ○実践文化演習 l (中国文化研修)

<授業テーマ>

中国の宗教と文化を体験する。

<授業概要>

事前講義において、中国の歴史と文化の概略を学ぶと共に、日本、なかんずく親鸞開頭の浄土真宗まで伝統されてきた、中国浄土教を代表する祖師の教えについて学習する。また現地研修においては、実際に中国浄土教の祖師ゆかりの寺院や都市を訪れ、浄土教の歴史に肌で触れると共に、中国の文化と歴史にも触れ、理解を深める。事後学習では、現地で学んだ中国浄土教の歴史や中国の文化について、体験を踏まえて整理し、発表会を行い、最終的にレポートにまとめる。

## ⑫ 管理運営

教学面における管理運営体制、特に教授会の役割は次のとおりとなっている。

大谷大学学則第7条及び大谷大学教授会規程に基づき、

- (1) 学生の入学及び卒業に関する事項
- (2) 学位の授与に関する事項
- (3) 教育課程の編成に関する事項
- (4) 教員の教育研究業績の審査等に関する事項

の各事項について、学長が決定を行うに当たり意見を述べることとなっている。

また、学長、学監、副学長及び部科長等（以下「学長等」という。）がつかさどる教育研究に関する次の事項について審議し、及び学長等の求めに応じ意見を述べることとなっている。

- (1) 学部、学科の設置改廃に関する事項
- (2) 大谷大学職制規程第 2 条及び第 13 条に定める、教授、准教授、講師及び助教について、前項第 4 号以外の審査等に関する事項
- (3) 客員教授及び非常勤講師の採用に関する事項
- (4) 進級判定、卒業論文提出資格判定に関する事項
- (5) 再試験判定に関する事項
- (6) 単位認定に関する事項
- (7) 在外研究員に関する事項
- (8) 学生の休学、復学、留学、転学及び退学に関する事項
- (9) その他学長等が必要と認めた事項

教授会は、文学部、社会学部、教育学部及び国際学部の専任の教授、准教授並びに講師をもって構成することとなっており、毎月第 3 水曜日に月 1 回開催することを定例とし、入学試験判定など臨時的な開催を含め、年間 18 回程度開催される。

## ⑬ 自己点検・評価

### 1. 自己点検・評価活動の概要

本学では、建学の理念に基づき、その使命を達成するために、教育研究活動等の状況について不断に自己点検及び評価活動を行い、教育研究水準の向上を図ることを大谷大学学則第 2 条に定めている。これに基づき、1997 年「自己点検・評価委員会」を組織し、2003 年 11 月には「自己点検・評価規程」を制定して、継続的に自己点検・評価活動を行ってきた。

2012 年度には、2011 年 10 月に発表した大谷大学グランドデザインを具体的に推進するために、組織等（各学部・学科と各事務局を指す）は各々の目標・行動計画を策定し、年度の終わりにそれらの目標・行動計画について自己点検・評価を行う取組を始めた。2017 年度までは、①年度末に提出された各組織の「自己点検・評価報告書」を、「自己点検・評価委員会」がその内容をチェックし所見を記載した上で、学長へ提出する。②各組織は点検・評価の結果を受け、次年度の目標・行動計画を新たに策定し、改善すべき項目に取り組み、年度末には当該年度の「自己点検・評価報告書」を作成するという活動を行ってきた。

2018 年度はこの体制の一部見直しを行い、第 3 期認証評価が示す「全学内部質保証推進組織」を明確にするために「自己点検・評価委員会」を廃止し、本学の運営に関する重要事項を審議する大学執行部のメンバーで構成する「内部質保証委員会」を内部質保証に責任を持つ組織として設置し、内部質保証の中心となって改善に繋げるシステムへと変更した。この「内部質保証委員

会」のもと、第3期認証評価の基準1から基準10までの項目を、組織・部局の活動を踏まえ各委員がそれぞれ責任者となって点検・評価活動を行い、年度末には「自己点検・評価報告書」を作成している。その検証は「内部質保証委員会」で行い、大学としての改善・改革の方策を策定するとともに、必要な支援策を講じている。

各組織による「自己点検・評価報告書」の公開について2012年度は概評のみであったが、2013年度から2017年度までの報告書は原則本学Webページにおいて公開している。2018年度以降は、大学基準協会による認証評価に準拠した形で作成した「自己点検・評価報告書」を本学のWebページ上に評定と合わせて公開している。

また、1998年・2008年・2015年大学基準協会提出の「自己点検・評価報告書」、大学基準協会による「認証評価結果」、2012年大学基準協会提出の「改善報告書」及び大学基準協会による「改善報告書検討結果」を本学Webページで公開している。2019年大学基準協会提出の「改善報告書」については、2020年度に本学Webページで公開する予定である。

## 2. 内部質保証の方針と手続

本学の内部質保証の方針を、以下のとおり定め、本学Webページにて公開している。

### 【内部質保証の方針】

本学は、建学の理念の実現のため3つの方針に基づいた教育活動を展開し、教育の質の向上をめざす。そのために適正な教員組織を編成し、教職員の資質の向上を図り、学生支援の充実を図る。また、教育研究活動の促進に必要な環境を整え、社会に貢献できる開かれた大学として永続するよう、経営基盤の整備に対し不断の努力を行う。

具体的な手続としては、2018年5月「内部質保証に関する方針ならびに手続」を日々の業務に関して意思決定を行う「大学運営会議」で決定した。手続については、2019年度に一部改訂を行い、以下のとおり全学の手続を定めている。

- ①内部質保証委員会は、学部・研究科・事務局に対して、内部質保証の状況を確認するために、自己点検・評価を行うことを指示する（9月～10月）。  
※学部長・大学院研究科長は、学科・専攻に自己点検・評価活動を指示し、それぞれに作成された報告書を集約し、学部・研究科の報告書として取りまとめる。
- ②各組織は年度末に基準1から基準10、学部、研究科ごとの自己点検・評価報告書を内部質保証委員会へ提出する（2月末）。  
※基準4「教育課程・学修成果」の点検・評価については、学部・研究科の報告書を集約する必要があるため、現段階においては全学共通の項目のみ提出する。
- ③自己点検・評価報告書をもとに内部質保証委員会で報告会を実施し、検証を行う（3月）。
- ④各組織は③の報告会を受けて、基準1から基準10の報告書を必要に応じて追記修正し、基準4は大学版としての報告書を作成し、内部質保証委員会へ提出する（4月）。
- ⑤内部質保証委員会は、自己点検・評価結果に基づいて、大学としての改善・改革の方策を策

定するとともに、必要な支援策を講じ、関係組織に指示を行う（7月以降）。

しかしながら、2019年度に実施した外部評価を受け、既存の学内の取組に対する「内部質保証委員会」の関わりが不十分であると判断し、さらに自己点検・評価の実施体制を見直すこととした。2020年度からは「内部質保証委員会」に代えて、大学執行部で構成する大学の意思決定機関の「大学運営会議」を、自己点検・評価実施を含む内部質保証の推進に責任を持つ組織に充て、質保証の取組を進めることとなっている【資料5 自己点検・評価規程】。あわせて、本学の内部質保証の定義及び取組をより明確にするため、2020年度には「内部質保証の方針」の改訂を予定している。

### 3. 外部評価の実施

自己点検・評価の客観性を担保し、内部質保証システムの適切性を向上させることを目的として、「内部質保証委員会」のもとに設置されている「運営部会」が中心となって2019年度から外部評価を実施している。

2019年度の外部評価は、5名の学外の有識者に外部評価委員を依頼し、前年度の自己点検・評価報告書、及び、根拠資料をもとに8月から10月にかけて実施した。2019年度は大学評価基準の2及び4から9までを評価対象とし、外部評価委員には、2回に渡る会議にも出席いただき、所見を作成していただいた。外部評価結果は、外部評価者からの所見と、外部評価を受けての本学の所見・改善策等を「外部評価結果報告書」として取りまとめ、12月末に本学 Web ページで公開を行った。さらに、外部評価結果を受けて「内部質保証委員会」は、関係組織に改善指示を行っている。今後も継続的に外部評価を実施し、さまざまな改善に向けて取り組んでいく【資料6 外部評価に関する細則】。

## ⑭ 情報の公表

本学では、「公益活動をになう社会的存在として社会に対する説明責任を果たす」こと、及び「本学における教育・研究活動の質の向上を図り魅力ある大学として評価を得る機会とする」ことを目的として、大谷大学ホームページ上において教育情報の公開を進めている。また公開諸データについては、大学基準協会『大学評価ハンドブック』の様式等を利用することにより、自己点検・評価活動と教育情報の公開を連動させ、継続的な改善・改革活動に結びつくようつとめている。現在公開している内容は、以下の通りとなっている。

## ア 大学の教育研究上の目的に関すること

### ▼大谷大学の学部・学科の名称、教育研究上の目的及び取得可能学位の名称を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教育研究上の目的及び取得可能学位の名称] 大谷大学の教育研究目的及び取得可能学位

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq0000012h9b.pdf>

### ▼大谷大学大学院の研究科・専攻の名称、教育研究上の目的及び取得可能学位の名称を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教育研究上の目的及び取得可能学位の名称] 大谷大学大学院文学研究科の教育研究目的及び取得可能学位

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq000001d584.pdf>

## イ 教育研究上の基本組織に関すること

### ▼大谷大学の沿革と建学の理念、教育研究目的と教育方針及び教育研究組織を掲載

Home > 教育情報の公表 > [大学の概要] 大学の概要

<http://www.otani.ac.jp/annai/index.html>

### ▼大谷大学、大谷大学大学院の教育研究組織の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [大学の概要] 教育研究組織

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq0000012h1v.pdf>

## ウ 教員組織、教員の数並びに各教員が有する学位及び業績に関すること

### ▼大谷大学文学部の教員の組織等について掲載

Home > 教育情報の公表 > [専任教職員数] 大谷大学文学部教員組織

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq000001kk97.pdf>

### ▼大谷大学文学部の学部・学科ごとの専任教員数を職位別・男女別・年齢階層別に掲載

Home > 教育情報の公表 > [専任教職員数] 大谷大学文学部教員職位・年齢別一覧

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq000001d598.pdf>

### ▼大谷大学大学院の教員の組織等について、研究科・専攻ごとの専任教員数を掲載

Home > 教育情報の公表 > [専任教職員数] 大谷大学大学院文学研究科教員組織

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq000003598d.pdf>

▼教員組織や各教員が有する学位や業績を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教員組織、教員が有する学位及び業績] 文学部、大学院文学研究科、短期大学部学科教員一覧

<http://www.otani.ac.jp/kyouin/index.html>

▼教育研究業績を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教員組織、教員が有する学位及び業績] 教育研究業績検索システム

<http://gdb.otani.ac.jp/gdb/find/>

**エ 入学者に関する受入れ方針及び入学者の数、収容定員及び在学する学生の数、卒業又は修了した者の数並びに進学者数及び就職者数その他進学及び就職等の状況に関すること**

▼大谷大学の入学者に関する受入方針、入学者数、収容定員、在学者数、卒業者数、退学者数、就職・進学者数等について掲載

Home > 教育情報の公表 > [入学者に関する受入方針、入学者数、収容定員、在学者数、卒業(修了)者数、進学者数、就職者数] 文学部

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq0000012hfe.pdf>

▼大谷大学大学院の入学者に関する受入方針、入学者数、収容定員、在学者数、学位授与状況、卒業者数、退学者数、就職・進学者数等について掲載

Home > 教育情報の公表 > [入学者に関する受入方針、入学者数、収容定員、在学者数、卒業(修了)者数、進学者数、就職者数] 大学院文学研究科

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq000001njrn.pdf>

**オ 授業科目、授業の方法及び内容並びに年間の授業の計画に関すること**

▼シラバス（授業概要）を掲載

Home > 教育情報の公表 > [業科目ごとの年間授業計画及び内容等] シラバス検索システム

<http://syllabus-pub.jp/otani/index.html>

▼学年暦を掲載

Home > 教育情報の公表 > [授業科目ごとの年間授業計画及び内容等] 学年暦

[http://www.otani.ac.jp/g\\_support/nab3mq000000136c.html](http://www.otani.ac.jp/g_support/nab3mq000000136c.html)

**カ 学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準に関すること**

▼大谷大学の学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準及び必修・選択・自由科目別の必要単位数等について掲載

Home > 教育情報の公表 > [学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準]  
文学部

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq0000012hcz.pdf>

▼大谷大学大学院の学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準及び必修・選択・自由科目別の必要単位数等について掲載

Home > 教育情報の公表 > [学修の成果に係る評価及び卒業又は修了の認定に当たっての基準]  
大学院文学研究科

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq0000012hbb.pdf>

## キ 校地・校舎等の施設及び設備その他の学生の教育研究環境に関すること

▼本部キャンパス 総合研究室の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 総合研究室

[http://www.otani.ac.jp/study\\_support/nab3mq000000z3qr.html](http://www.otani.ac.jp/study_support/nab3mq000000z3qr.html)

▼本部キャンパス 図書館の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 図書館

[http://www.otani.ac.jp/kyo\\_kikan/library/index.html](http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/library/index.html)

▼本部キャンパス 語学学習支援室の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 語学学習支援室

<http://www.otani.ac.jp/kouryu/index.html>

▼本部キャンパス 大学博物館の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 博物館

[http://www.otani.ac.jp/kyo\\_kikan/museum/index.html](http://www.otani.ac.jp/kyo_kikan/museum/index.html)

▼本部キャンパス 真宗総合研究所の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 真宗総合研究所

<http://www.otani.ac.jp/crj/nab3mq00000013wq.html>

▼本部キャンパス 主要施設の概況・建物配置図を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 主要施設概況 本部キャンパス

<https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1fUsJEw7pa0d6k4J2GDyoz9DoPSg&ie=UTF8&hl=ja&msa=0&ll=35.04233000000014%2C135.75898499999994&spn=0.002196%2C0.002891&z=18&source=embed>

▼湖西キャンパス 主要施設の概況・建物配置図を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 主要施設概況 湖西キャンパス

<https://www.google.com/maps/d/viewer?mid=1WqCE6WQzM6ij2RVtmaAAk4Nh-8&hl=ja&ie=UTF8&msa=0&ll=35.1012060000001%2C135.90026699999998&spn=0.004389%2C0.005794&z=17&source=embed>

▼本部・湖西キャンパス 主要施設の校地・校舎面積を掲載

Home > 教育情報の公表 > [校地・校舎等の施設及び教育研究環境] 校地・校舎等建物面積一覧

<http://www.otani.ac.jp/data/nab3mq0000012gsm-att/nab3mq000001kk9l.pdf>

## ク 授業料、入学料その他の大学が徴収する費用に関すること

▼入学金・授業料・施設費等の学費、諸会費について掲載

Home > 教育情報の公表 > [授業料、入学料及び大学が徴収する費用] 入学金、授業料、施設費等の学費及びその他の費用

<http://www.otani.ac.jp/nyushi/nab3mq0000001060.html>

▼学費の延納、学費の減免について掲載

Home > 教育情報の公表 > [授業料、入学料及び大学が徴収する費用] 学費延納、学費減免

[http://www.otani.ac.jp/g\\_support/nab3mq00000013k8.html](http://www.otani.ac.jp/g_support/nab3mq00000013k8.html)

## ケ 大学が行う学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援に関すること

▼学生生活支援体制（学生支援課、学生相談室、保健室、人権センター）の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援] 学生生活サポートの紹介

[http://www.otani.ac.jp/g\\_support/index.html](http://www.otani.ac.jp/g_support/index.html)

▼学習支援体制（教務課、総合研究室、語学学習支援室、情報処理室、図書館、博物館、教職支援センター、実習支援センター）の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援] 学習を支援

する体制

[http://www.otani.ac.jp/study\\_support/index.html](http://www.otani.ac.jp/study_support/index.html)

▼学生相談室の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援] 心と身体のケアについて (学生相談室)

[http://www.otani.ac.jp/g\\_support/nab3mq00000013r6.html](http://www.otani.ac.jp/g_support/nab3mq00000013r6.html)

▼進路・就職支援体制 (キャリアセンター) の概要を掲載

Home > 教育情報の公表 > [学生の修学、進路選択及び心身の健康等に係る支援] 進路・就職支援

[http://www.otani.ac.jp/career\\_support/index.html](http://www.otani.ac.jp/career_support/index.html)

コ その他 (教育上の目的に応じ学生が修得すべき知識及び能力に関する情報、学則等各種規程、設置認可申請書、設置届出書、設置計画履行状況等報告書、自己点検・評価報告書、認証評価の結果 等)

▼学則を掲載

Home > 大学概要 > [大学基礎データ] 学則

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000zuw.html>

▼設置届出書関係書類等を掲載

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > [設置届出書関係書類の公表] 文学部収容定員関係学則変更認可申請書 (歴史学科・文学科)

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000006miz1.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000006mizd.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000006mizk.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000006mizr.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000006mizy.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000006mj05.pdf>

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > [設置届出書関係書類の公表] 社会学部設置届出書

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000005kc0k.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000005kc0p.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000005kc0f.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000005kc0u.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000005kc0z.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000acoj-att/nab3mq000005kc14.pdf>

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > [設置届出書関係書類の公表] 教育学部設置届出書

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000005kc07.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000005kc19.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000005kc1e.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000005kc1j.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000005kc1o.pdf>

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000005kc1t.pdf>

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > [設置届出書関係書類の公表] 設置計画履行状況報告書 (社会学部)

2019 年度

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000006miyk.pdf>

2018 年度

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000006g8h9.pdf>

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > [設置届出書関係書類の公表] 設置計画履行状況報告書 (教育学部)

2019 年度

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000006miyr.pdf>

2018 年度

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq000000acoj-att/nab3mq000006g8lb.pdf>

#### ▼大学評価 「2014 年度自己点検・評価報告書・基礎データ」を掲載

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [自己点検・評価報告書] 2014 年度自己点検・評価報告書・基礎データ

大谷大学

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004ddwq.html](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004ddwq.html)

大谷大学短期大学部

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004de6r.html](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004de6r.html)

#### ▼大学評価 大学評価結果ならびに認証評価結果を掲載

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [(財) 大学基準協会による機関別認証評価結果] 大学に対する大学評価結果ならびに認証評価結果

大谷大学

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq0000000zti-att/daigakuhyoukakekka\\_HP.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq0000000zti-att/daigakuhyoukakekka_HP.pdf)

大谷大学短期大学部

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq0000000zti-att/tandaihyouka\\_HP.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq0000000zti-att/tandaihyouka_HP.pdf)

▼大学評価 外部評価結果報告書を掲載

2019 年度

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000006jo1a.html](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000006jo1a.html)

▼「学生による授業評価アンケート」調査結果を掲載

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [授業評価アンケート]

2019 年度（後期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000007efug.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000007efug.pdf)

2019 年度（前期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000006vilz.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000006vilz.pdf)

2018 年度（後期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000006blfe.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000006blfe.pdf)

2018 年度（前期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005xnav.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005xnav.pdf)

2017 年度（後期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005t53n.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005t53n.pdf)

2017 年度（前期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005ci9h.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005ci9h.pdf)

2016 年度（後期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005449y.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000005449y.pdf)

2016 年度（前期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000004q26f.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000004q26f.pdf)

2015 年度（後期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000004dhc8.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000004dhc8.pdf)

2015 年度（前期）

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000004d2tn.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2qo-att/nab3mq000004d2tn.pdf)

▼「在学生満足度アンケート」調査結果を掲載

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [在学生満足度アンケート調査] 2017 年度

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000006rnlg.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000006rnlg.pdf)

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [在学生満足度アンケート調査] 2013 年度

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000004eyq7.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000004eyq7.pdf)

▼「卒業生アンケート」調査結果を掲載

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [卒業生アンケート] 2018 年度

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000006rnlg.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000006rnlg.pdf)

Home > 教育情報の公表 > 大学の概要 > 大学評価 > [卒業生アンケート] 2015 年度

[http://www.otani.ac.jp/kikan\\_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000004eyq7.pdf](http://www.otani.ac.jp/kikan_hyouka/nab3mq000004d2iw-att/nab3mq000004eyq7.pdf)

▼教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報。学部・学科、研究科・専攻での学びの特色、カリキュラムの概要や主要な授業科目の概要、身につける力、及び卒業後の進路など学生が修得すべき知識や能力に関する情報を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 文学部での学び

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 真宗学科（思想探究コース、現代臨床コース、国際コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/shinshu/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 仏教学科（現代と仏教コース、文化美術コース、仏教思想コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/bukkyo/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 哲学科（西洋哲学・日本哲学コース、倫理学・人間関係学コース、宗教学・生死学コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/tetsugaku/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 社会学科（地域政策学コース、現代社会学コース、社会福祉学コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/shakai/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 歴史学科（日本史コース、東洋史コース、交流アジアコース、歴史ミュージアムコース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/rekishi/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 文学科（国文学コース、中国文学コース、英文学コース、ドイツ文学コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/bungaku/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 国際文化学科（現代アジアコース、欧米文化コース、文化環境コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/kokusai/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 人文情報学科（情報マネジメントコース、メディア表現コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/jinbun/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 教育・心理学科（教育学コース、心理学コース）

<http://www.otani.ac.jp/bungakubu/kyoikushinri/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 大学院文学研究科の学び

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/index.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 真宗学専攻（修士課程・博士後期課程）

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000001q0u.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 仏教学専攻（修士課程・博士後期課程）

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000001q29.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 哲学専攻（修士課程・博士後期課程）

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000001q3o.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 社会学専攻（修士課程・博士後期課程）

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000001q53.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 仏教文化専攻（修士課程・博士後期課程）

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000001q6i.html>

Home > 教育情報の公表 > [教育上の目的に応じた学生が修得すべき知識及び能力に関する情報] 国際文化専攻（修士課程・博士後期課程）

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000001q7x.html>

▼教育の国際連携の状況について、本学が提携する海外の学術交流協定校に関する情報を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教育の国際連携の状況] 協定を締結している海外の大学等

<http://www.otani.ac.jp/kouryu/nab3mq00000011za.html>

▼教育の国際連携の状況について、外国人留学生関連情報に対する情報を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教育の国際連携の状況] 外国人留学生関連情報

<http://www.otani.ac.jp/ryugakusei/index.html>

▼世界の第一線で活躍する学者を客員教授として招き開催する大学院特別セミナー についての情報を掲載

Home > 教育情報の公表 > [教育の国際連携の状況] 大学院特別セミナー

<http://www.otani.ac.jp/daigakuin/nab3mq0000007lz1.html>

▼財務情報（学校法人真宗大谷学園）を掲載

Home > 教育情報の公表 > [財務情報] 学校法人真宗大谷学園 決算報告・事業報告

[http://www.otani.ac.jp/sinsyu\\_gakuen/nab3mq0000004uo1.html](http://www.otani.ac.jp/sinsyu_gakuen/nab3mq0000004uo1.html)

▼財務情報（大谷大学・大谷大学短期大学部）を掲載

Home > 教育情報の公表 > [財務情報] 財務状況（大学）

<http://www.otani.ac.jp/annai/nab3mq0000000zs4.html>

## ⑮ 教育内容等の改善を図るための組織的な研修等

### 1. 教務委員会 FD 部会の設置とその取り組み

大谷大学では、教員の資質の維持向上に全学をあげて取り組む姿勢を明確にし、教育内容と学修環境のいっそうの充実につとめるために、教務委員会の中にカリキュラムの検討を中心とする「教務部会」と、FD 活動を中心とする「FD 部会」を設置している。FD 活動とカリキュラムの連携を図りながら、教育の質の向上に資する取り組みを進めている。また FD 部会では、全ての学部・学科に FD 部会委員を置き、学部・学科との連携のもと全学的な参加を可能とする体制を敷いている。

FD 部会では、各授業における「授業計画（シラバス）」の記載内容の確認を毎年行うほか、定例の会合を年 5 回程度開催している。教育内容・授業方法の改善に関することや、FD 活動に係る研究会及び研修会に関すること、FD 活動に係る調査・研究に関すること、他大学・団体等との連携、外部の研修プログラムへの参加やその報告会の開催、その他 FD 活動全般に関すること、などについて検討・実施している。

また、研修会等の開催については、春のオリエンテーション期間、もしくは全教員が出席可能となる水曜日等の夕刻に時間を設定し、以下の研修会を企画・開催している。

〔研修会等の実施内容〕

- 新任教員を対象とした研修会（学長による建学の理念に関する講演を含む）
- 新任教員を対象とした人権問題学習会
- 専任・非常勤を含めた教科別担当者連絡会
- 学長・FD 部会委員と新任専任教員との懇話会
- 全教員（非常勤講師を含む）を対象とした FD 研修会
- 学外フォーラム等への参加及び事後報告会
- 授業評価アンケートを活用した FD の取り組みについての検討会

### 2. 学部における教員の資質の維持向上

新設する国際学部においては、学部における教育活動の充実・向上を図るため、学部所属教員で構成する「学科会議」を設置する。学科会議には所属教員全員が出席し、教育・研究に関する情報交換を行い、それらの改善を図っている。原則として毎月第三水曜日に定例開催し、必要に応じて臨時会議を開催する。会議では、カリキュラム全般についての確認・検討や学生指導体制、教授方法、実践系科目や国際交流科目の運営、キャリア指導など、学部の教育・研究活動全般にわたり審議・遂行する。

〔学科会議における審議内容〕

- 学部・学科設置趣旨・目標の確認・共有
- 学生指導方法及び成績評価基準の確認・共有
- 演習（ゼミ）運営方法の確認と情報交換
- 実践系科目に関する活動推進と運営・指導方法についての検討

- 学生の近況報告とその対応についての情報交換
- 入学者アンケートの分析

### 3. 大学職員に必要な知識・技能を習得し、必要な能力及び資質を向上させる研修等の取組

大学職員の能力開発のための研修については、学内研修と学外研修に大別して実施している。

学内研修は、新規採用者対象の「新人研修」、それぞれテーマを設定した「階層別研修（若手・中堅職員研修、監督職研修、管理職研修）」、配属部署に関わらず本学職員として必要な基礎知識を習得するための「基礎研修」を行っている。「新人研修」は、新任教員・事務職員を対象とし、学長による建学の理念の説明、教育研究や学生生活の現状と課題、人権教育の取組等について説明し、本学の特徴や現況が理解できるよう支援している。「基礎研修」は、20代から30代前半の事務職員を対象に、事務部長・課長が講師を務め、大学史、学校会計、学生募集、キャリア教育、研究、図書館、規程の作成・改正方法、教学運営などをテーマとして行っている。部署単位で実施する「部署別研修」への補助制度を設け、各課・部における独自の研修会の開催を奨励している。

また、教授会終了後の時間を使い、障害学生支援に係る合理的配慮や配慮学生への対応、認証評価システムなど大学職員として必要な現代的課題を、教育職員・事務職員合同で学習する研修会を開催している。

学外研修は、主に他大学や学外団体が主催する研修会・講演会へ教員・事務職員を派遣することにより実施している。学外での研修会・講演会は、高等教育を取り巻く環境の変化や先進的な事例を理解し、本学が抱えている課題の解決に向けて新しい発想を得、大学人や異業種の人のネットワークを作る大切な機会となっている。

これら学内外の研修に教員・事務職員が積極的に参加できる環境を整えることにより、教育研究活動が円滑に遂行されるよう支援している。

## ⑩ 社会的・職業的自立に関する指導等及び体制

### ア 教育課程内の取組について

卒業要件の現代総合科目（選択必修）の中にキャリア形成系の科目群を置き、「インターンシップ」「キャリアデザイン概論」「キャリアデザイン実践」を開講している。

「インターンシップ」は、事前講義（マナー講習含む）、2週間の就業体験（実習）、事後講義と体系的に履修する教育プログラムとなっている。「キャリアデザイン概論」は、就職に関することだけでなく大学生生活を主体的に過ごすために必要な知識や態度を身につけ、目標を持って大学生

活を過ごすことができるよう、考える機会を提供している。「キャリアデザイン実践」は、社会の中で自立して生きていくために何が必要なのか、自らの進路や将来について、グループワークを中心とした体験学習の中で考える内容となっている。これらのキャリア形成に向けた体系的な科目以外に、情報処理、日本語表現、知的財産権など実践的な学びを通して社会に貢献するための幅広い知見を身につける科目も開講している。

## イ 教育課程外の取組について

第1学年入学時に開かれるオリエンテーションのキャリア支援ガイダンスにおいて「キャリアデザインブック」を配布し、小中高までのキャリア（経験）を振り返るとともに、1年間の目標、4年間の目標を設定させ、大学生活の過ごし方やキャリアデザインについて考える機会を設けている。

また、各学年の年度はじめに、進路就職ガイダンスを開催し、前年度の振り返りと当該年度（学年）で取り組むべき課題の確認や目標設定を行っている。

あわせて、第1学年（新入生）を対象に「自己発見診断（診断ツールを利用した検査）」を行い、現時点での自身の強み、弱み、職業的関心を客観的に確認する機会を設け、具体的に取り組む課題の発見につなげている。なお、この検査は第3学年で実施する検査と対応しており、成長（変化）が確認できるようになっている。この結果は、第3学年後期から始まる就職活動準備に必要となる自己理解・自己分析にいかされている。

さらに、先輩社会人を招いての経験談を聞く会や企業の社長を招いての企業が求める人物像や期待を聞く機会を設け、社会人となる意識の醸成につとめている。

その他にも、「TOEIC L&R テスト レベルアップ講習」や語学学習支援室が主催し、専任・非常勤教員が実施する英語、ドイツ語、フランス語、中国語、韓国・朝鮮語の学習会を開講し、学生の意欲にこたえるための研鑽の機会を設けている。

## ウ 適切な体制の整備について

### 学生支援委員会・キャリア部会

学生支援を考える組織として学生支援委員会を設置し、その下に学生部会、キャリア部会の各部会を置いている。委員会・各部会は教員委員と所管部署の部課長から構成されており、進路就職については、キャリア部会が担当し、学生支援部キャリアセンターが所管している。

キャリア部会ではキャリア支援に関する内容、年度の目標設定、具体的な支援内容や支援方法などについて議論し、その結果を部署に下し支援を行っている。年度末の学生支援委員会では、各部会の目標に対する達成度や効果について検証している。結果は次年度の目標設定に生かされている。

### 学生支援部キャリアセンター

かつて就職支援に特化した部署（就職課）から、現在は進路就職にとどまらず、早い学年から将来を考えるキャリア支援、各種資格取得支援を行う部署としてキャリアセンターを設置している。キャリアセンターは7名（専任5名、嘱託2名）の常勤スタッフと個人面談や模擬面接を担当するキャリアアドバイザー（1日2～3名）の体制をとっている。

専任スタッフは個人指導のほか各種ガイダンス、資格講習などの企画・運営業務、企業対応など対外的な業務を行っている。特に昨今はメンタル面での課題を抱える学生の対応にも力を入れている。

また、毎年10月からは3年生を対象とした履歴書作成指導を行っている。その第一歩として、アドバイザーによる自己理解・自己分析のための個人面談（1名4回程度の面談）に力を入れている。この期間は個人面談を担当するアドバイザーを増員し対応している。

以上



# 添付資料 目次

[インデックス番号]

資料 1	履修モデル	①
資料 2	慶間館パンフレット（抜粋）	②
資料 3	教育実習受入承諾書（中・高）	③
資料 4	教育実習受入先一覧	④
資料 5	自己点検・評価規程	⑤
資料 6	外部評価に関する細則	⑥



国際文化学科 英語コミュニケーションコース

科目区分	1年次				2年次				3年次				4年次				合計	
	1セメ	単位数	2セメ	単位数	3セメ	単位数	4セメ	単位数	5セメ	単位数	6セメ	単位数	7セメ	単位数	8セメ	単位数		
共通基礎科目	総合科目	人間学Ⅰ	必 2	人間学Ⅰ	必 2	人間学Ⅱ	必 2	人間学Ⅱ	必 2									
	大学導入	学びの発見	必 2															
	必修外国語	外国語Ⅰ	英語Ⅰ	必 1	英語Ⅰ	必 1												
			英語Ⅰ	必 1	英語Ⅰ	必 1												
			初修外国語Ⅰ	必 1	初修外国語Ⅰ	必 1												
			初修外国語Ⅰ	必 1	初修外国語Ⅰ	必 1												
	外国語Ⅱ					英語Ⅱ/初修外国語Ⅱ	必 1	英語Ⅱ/初修外国語Ⅱ	必 1									
						英語Ⅱ/初修外国語Ⅱ	必 1	英語Ⅱ/初修外国語Ⅱ	必 1									
	選択外国語		英語読解(中級)1	選 1	英語読解(中級)2	選 1	インテンシブ英会話(中級)1	必 4	インテンシブ英会話(中級)2	必 4	英語会話(中級)3	選 1	英語会話(中級)4	選 1				
			英語読解(上級)3	選 1	英語読解(上級)4	選 1					英作文(中級)1	選 1	英作文(中級)2	選 1				
			英語会話(中級)1	選 1	英語会話(中級)2	選 1												
	計		10		8		8		8		2		2		0	0	38	
	現代総合科目	演習	国際文化演習Ⅰ	必 2	国際文化演習Ⅰ	必 2	国際文化演習Ⅱ	必 2	国際文化演習Ⅱ	必 2	国際文化演習Ⅲ	必 2	国際文化演習Ⅲ	必 2	国際文化演習Ⅳ	必 2	国際文化演習Ⅳ	必 2
		概論	国際文化概論	必 2	国際言語概論	必 2												
		講義		英文学概論1	選 1	英文学概論2	選 1	京都の歴史と文化	選 2	世界の宗教と文化	選 2	国際関係論1	選 2	国際関係論2	選 2	ドイツ文学講義1	選 2	フランス文学講義1
			英語学概論1	選 1	英語学概論2	選 1	英米の文化5	選 2	英米の文化6	選 2	英米の文化1	選 2	英米の文化2	選 2	ドイツ文学講義2	選 2	フランス文学講義2	選 2
			英米の文化3	選 4	英米の文化4	選 2	英語のしくみ1	選 4	英語のしくみ2	選 4	アメリカ文学講義1	選 4	アメリカ文学講義2	選 4				
			比較文化講義1	選 4	比較文化講義2	選 2	ヨーロッパの文化1	選 2	ヨーロッパの文化2	選 2	キリスト教学1	選 2	キリスト教学2	選 2				
			グローバル・ボランティア論	選 2			イギリス文学講義1	選 2	イギリス文学講義2	選 2			日本ポップカルチャー論	選 2				
							西洋史講義1	選 2	西洋史講義2	選 2			国際文化特殊講義1	選 2				
実践研究		A	英語基礎演習	必 2	英語基礎演習	必 2												
		B					実践文化演習f (カナダ語学研修)	必 4										
		C					English Workshop & Camp	必 2	English Workshop 2	必 2	English Workshop 3	必 2	English Workshop 4	必 2				
卒業研究							Pop Culture in English 1	選 2	Pop Culture in English 2	選 2	World News	選 2	Global Communication	選 2				
											Teaching English to Children 1	選 2	Teaching English to Children 2	選 2			卒業論文	必 8
計			10		8		10		14		8		8		4	12	74	
現代総合科目		キャリア形成系	キャリアデザイン概論1	選 2	キャリアデザイン概論2	選 2												
	自然生命系									人間関係の心理学1	選 2	人間関係の心理学2	選 2					
	歴史文化系					ドイツの民衆文化	選 2			フランスの民衆文化	選 2							
	計		2		2		2		0		4		2		0	0	12	
合計		22		18		20		22		14		12		4	12	124		

国際文化学科 欧米文化コース

科目区分	1年次				2年次				3年次				4年次				合計	
	1セメ	単位数	2セメ	単位数	3セメ	単位数	4セメ	単位数	5セメ	単位数	6セメ	単位数	7セメ	単位数	8セメ	単位数		
共通基礎科目	総合科目	人間学 I	必 2	人間学 I	必 2	人間学 II	必 2	人間学 II	必 2									
	大学導入	学びの発見	必 2															
	必修外国語	外国語 I	英語 I	必 1	英語 I	必 1												
			初修外国語 I	必 1	初修外国語 I	必 1												
		外国語 II	英語 II / 初修外国語 II	必 1	英語 II / 初修外国語 II	必 1												
			英語 II / 初修外国語 II	必 1	英語 II / 初修外国語 II	必 1												
	選択外国語	英語読解(中級)1	選	英語読解(中級)2	選	英語読解(中級)3	選	英語読解(中級)4	選	英語会話(中級)3	選	英語会話(中級)4	選	0~1				
		英語読解(上級)3	選	英語読解(上級)4	選	英語会話(中級)1	選	英語会話(中級)2	選	英作文(中級)1	選	英作文(中級)2	選					
		ドイツ語のしくみと表現(初級)1	選	ドイツ語のしくみと表現(初級)2	選	ドイツ語読解(中級)1	選	ドイツ語読解(中級)2	選	フランス語のしくみと表現(中級)	選							
		ドイツ語読解(初級)1	選	ドイツ語読解(初級)2	選	フランス語会話(中級)	選	フランス語読解(中級)	選									
		ドイツ語会話(初級)1	選	ドイツ語会話(初級)2	選													
		フランス語のしくみと表現(初級)	選	フランス語読解(初級)	選													
		フランス語会話(初級)	選															
	計		9~10		7		5		5		1		0~1		0		0	28
	実践研究	演習	国際文化演習I	必 2	国際文化演習I	必 2	国際文化演習II	必 2	国際文化演習II	必 2	国際文化演習III	必 2	国際文化演習III	必 2	国際文化演習IV	必 2	国際文化演習IV	必 2
概論		国際文化概論	必 2	国際言語概論	必 2													
講義		ヨーロッパの文化1	選	ヨーロッパの文化2	選	京都の歴史と文化	選	世界の宗教と文化	選	キリスト教学 1	選	キリスト教学 2	選			国際文化特殊講義3	選	
		英米の文化3	選	英米の文化4	選	英米の文化5	選	英米の文化6	選	国際関係論1	選	国際関係論 2	選			国際文化特殊講義4	選	
		英語学概論1	選	英語学概論2	選	西洋史講義1	選	西洋史講義2	選	アメリカ文学講義1	選	アメリカ文学講義2	選					
		英文学概論1	選	英文学概論2	選	英語のしくみ1	選	英語のしくみ2	選	ドイツ文学講義1	選	フランス文学講義1	選					
		比較文化講義1	選	比較文化講義2	選	イギリス文学講義1	選	イギリス文学講義2	選	ドイツ文学講義2	選	フランス文学講義2	選					
		グローバル・ボランティア論	選							英米の文化1	選	英米の文化2	選					
												国際文化特殊講義1	選					
											国際文化特殊講義2	選						
											日本ポップカルチャー論	選						
A		英語基礎演習	必 2	英語基礎演習	必 2													
		B				English Workshop & Camp	選 2	English Workshop 2	選	English Workshop 3	選 2	English Workshop 4	選 2					
									実践文化演習	選								
C						Pop Culture in English 1	選 2	Pop Culture in English 2	選 2	World News	選	Global Communication	選	西洋史文献を読む1	選 2			
					表現文化演習1	選	表現文化演習2	選	Teaching English to Children1	選 2	Teaching English to Children2	選 2						
									言語文化演習1	選	言語文化演習2	選						
卒業研究															卒業論文	必 8		
計		10		8		10		10		10		14		4		12	78	
現代総合科目	キャリア形成系	キャリアデザイン概論 1	選 2	キャリアデザイン概論 2	選 2													
	自然生命系					人間理解の心理学 1	選 2	人間理解の心理学	選 2									
	歴史文化系					フランスの言語文化	選 2	ドイツの言語文化	選 2	フランスの民衆文化	選 2		芸術表現	選 2				
										ドイツの民衆文化	選 2							
計		2		2		4		4		4		0		2		0	18	
合計		21~22		17		19		19		15		14~15		6		12	124	

国際文化学科 アジア文化コース

科目区分	1年次				2年次				3年次				4年次				合計
	1セメ	単位数	2セメ	単位数	3セメ	単位数	4セメ	単位数	5セメ	単位数	6セメ	単位数	7セメ	単位数	8セメ	単位数	
共通基礎科目	総合科目	人間学 I	必 2	人間学 I	必 2	人間学 II	必 2	人間学 II	必 2								
	大学導入	学びの発見	必 2														
	必修外国語	外国語 I	英語 I	必 1	英語 I	必 1											
			英語 I	必 1	英語 I	必 1											
			初修外国語 I	必 1	初修外国語 I	必 1											
			初修外国語 I	必 1	初修外国語 I	必 1											
	外国語 II					英語 II / 初修外国語 II	必 1	英語 II / 初修外国語 II	必 1								
						英語 II / 初修外国語 II	必 1	英語 II / 初修外国語 II	必 1								
	選択外国語		中国語読解(初級)1	選 1	中国語読解(初級)2	選 1	中国語会話(中級)1	選 1	中国語会話(中級)2	選 1	中国語会話(上級)1	選 1	中国語会話(上級)2	選 1			
			中国語会話(初級)1・3	選 1	中国語会話(初級)2・4	選 1	韓国・朝鮮語会話(中級)	選 1			韓国・朝鮮語読解(上級)	選 1					
			韓国・朝鮮語会話(初級)1	選 1	韓国・朝鮮語会話(初級)2	選 1											
			中国語のしくみと表現(初級)1	選 1	中国語のしくみと表現(初級)2	選 1											
			韓国語のしくみと表現(初級)1	選 1	韓国語のしくみと表現(初級)2	選 1											
	計		10	8		5	5		1		1		0		0	30	
	現代総合科目	演習	国際文化演習I	必 2	国際文化演習I	必 2	国際文化演習II	必 2	国際文化演習II	必 2	国際文化演習III	必 2	国際文化演習III	必 2	国際文化演習IV	必 2	
概論		国際文化概論	必 2	国際言語概論	必 2												
講義			グローバル・ボランティア論	選 2	東アジアの文化2	選 2	京都の歴史と文化	選 2	世界の宗教と文化	選 2	国際関係論1	選 2	国際関係論2	選 2	国際文化特殊講義5	選 2	
			東アジアの文化1	選 2					現代朝鮮半島事情	選 2	比較文化講義1	選 2	比較文化講義2	選 2	国際文化特殊講義6	選 2	
											越境するアジアの文化1	選 2	国際文化特殊講義3	選 2			
											越境するアジアの文化2	選 2	国際文化特殊講義4	選 2			
実践研究		A	英語基礎演習	必 2	英語基礎演習	必 2											
		B					English Workshop & Camp	選 2	English Workshop 2	選 2							
		C					Pop Culture in English 1	選 2	Pop Culture in English 2	選 2	言語文化演習1	選 2	言語文化演習2	選 2			
卒業研究						表現文化演習1	選 2	表現文化演習2	選 2					卒業論文	必 8		
計		10	8		8	10		8		12		2		14	72		
現代総合科目	キャリア形成系	キャリアデザイン概論1	選 2	キャリアデザイン概論2	選 2												
	自然生命系									人間関係の心理学1	選 2	人間関係の心理学2	選 2				
	歴史文化系			近代日本とアジア	選 2	中国の言語文化	選 2	東アジアの宗教文化	選 2	中国の歴史と文学	選 2	中国の民衆文化	選 2				
						朝鮮半島の美術	選 2	アジアの侵略と宗教	選 2	東南アジアの宗教文化	選 2	現代東南アジア事情	選 2				
計		2	4		4	4		4		4		0		0	22		
合計		22	20		17	19		13		17		2		14	124		



# 慶聞館

K Y O M O N K A N

【典拠】  
親鸞『教行信証』総序

斯以慶所聞、嘆所獲矣。  
(ここをもって、聞くところを慶び、獲るところを嘆ずるなりと。)

自ら創る  
「学び」の  
かたち

伝統を、  
社会に開き、  
未来へつなぐ

多様な教育空間を表現し、  
主体的な学びをサポートします。

大谷  大学



# キャンパス整備の 理念・コンセプト

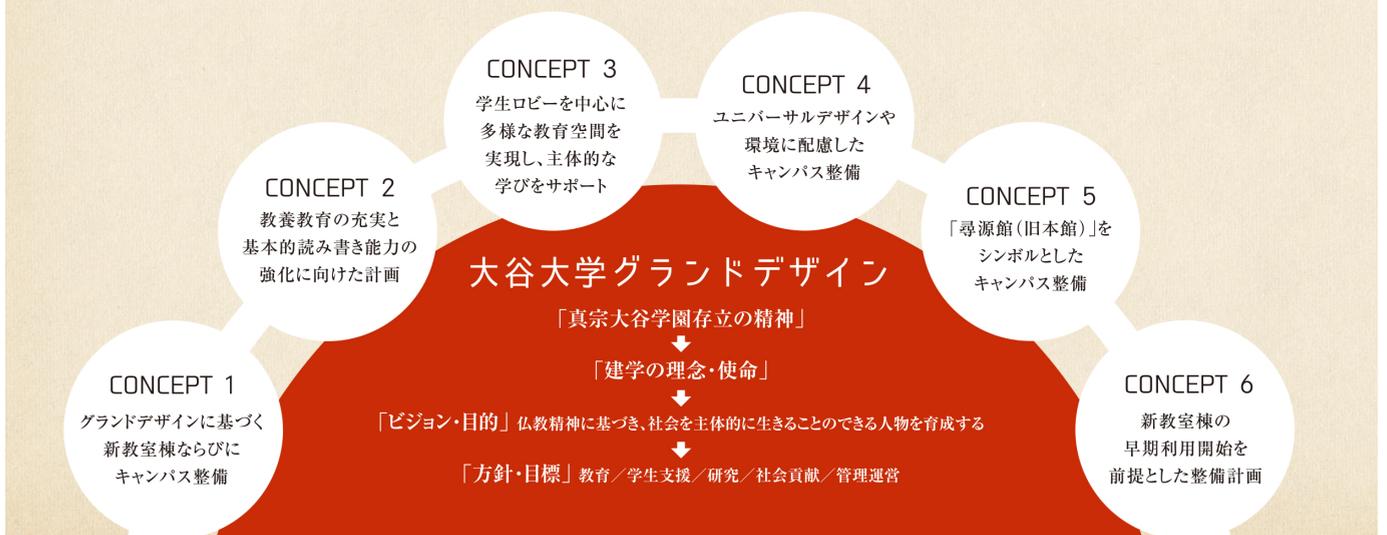


## 自ら創る「学び」のかたち — 伝統を、社会に開き、未来へつなぐ —

本学は、教育・研究力のより一層の充実を図り、学生が主体的に学ぶことができる新しい環境づくりを目指して、2018年完成を目標に、新教室棟の建築を含めた本部キャンパスの総合整備に着手しました。これは、2014年に築53年となる既存の研究室棟（開思館）・事務室棟（至誠館）や2015年に築50年となる教室棟（1号館旧館部分）等の建て替えという、長期整備計画に基づく取り組みではありますが、本学の伝統を踏まえつつ、未来を見据えた新たな本学を創造する事業として計画しました。新しい本学については、すでに2011年に、その構想を表した「大谷大学グランドデザイン」が発表されています。そこでは、初代学長清沢満之と第3代学長佐々木月樵によって示された建学の理念をもとに、大谷大学を「仏教を基盤として、人間の真の立脚地を問う」大学であると確認しています。その上で、教育のビジョンを「仏教精神に基づき、社会を主体的に生きることのできる人物を養成する」ものとして示しています。この度の新教室棟建設及びキャンパス整備計画は、長期的な大学運営構想に立った計画ではありますが、具体的には「グランドデザイン」に示された5つの基本方針を総合的に実現するための取り組みであります。

### 大谷大学グランドデザイン 5つの基本方針

[教育に関する方針] <b>社会に貢献し 活躍できる能力の育成</b>	[学生支援に関する方針] <b>学修に専念し、 充実した学生生活を支援</b>	[研究に関する方針] <b>学術交流の活性化</b>	[社会貢献に関する方針] <b>幅広く社会との連携を 図る教育活動</b>	[管理運営に関する方針] <b>ユニバーサルデザインや環境に 十分配慮した、新たなキャンパス整備</b>
--	--	-------------------------------	--	---





学生ロビーを中心に多様な教育空間を実現し  
主体的な学びをサポート



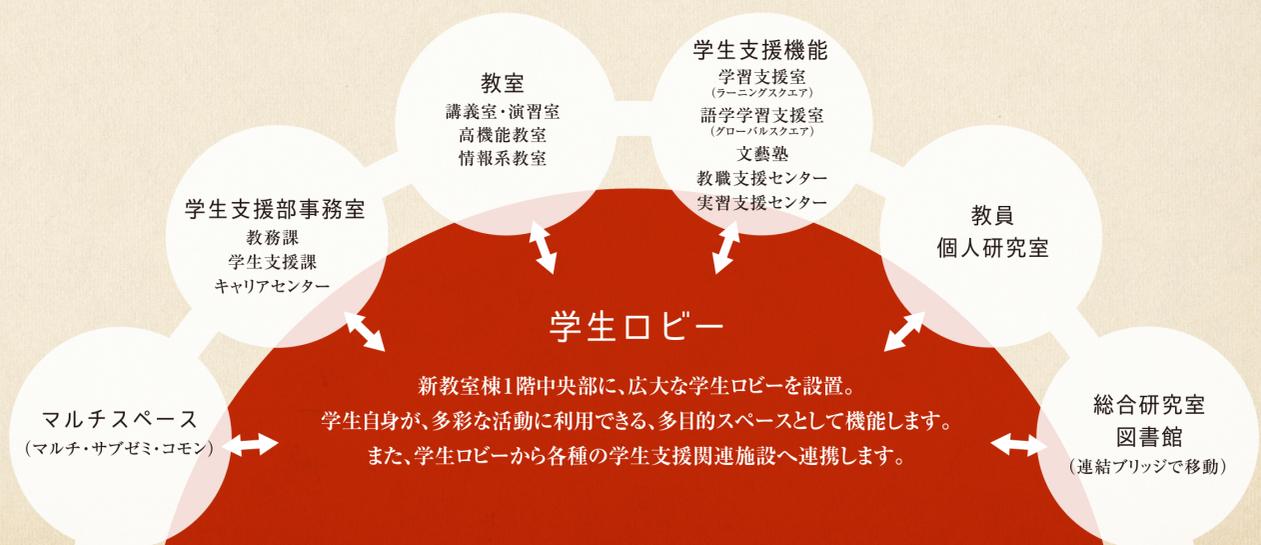
■キャリアセンター



■語学学習支援室[グローバルスクエア]



■マルチスペース



## 主体的な学びのサポート機能

学生の学びや活動を有機的にサポートし、アクティブラーニングも展開するなど、さまざまに活用されるスペースとしてマルチスペース(マルチ・サブゼミ・コモン)を各階に配置



1F 学生ロビー  
(合計178席／屋内130席・屋外48席)



2F～5F マルチスペース

各階3カ所に設けられたマルチスペースは、大谷大学のシンボルでもある尋源館を望む空間。100年間継承されて来た建学の精神を、さらに未来につなぐ「赤レンガ」を眺めながら、学生と教員、学生同士が交流を図り、アクティブラーニングを展開するなど、さまざまに活用されるスペースです。



2F/4F サブゼミスペース[プロジェクター・ホワイトボード完備]  
ユニークな視点で設置されているのが、マルチスペース(サブゼミ)。2階は3階にかけた吹き抜けも利用し、開放的な空間でお互いに刺激を受けながら利用できるスペース。ユニークなスタイルで参加できる学びの機会を創出するスペースとします。



5F コモンスペース[大型モニター・ホワイトボード完備]  
マルチスペース(コモン)は、グループワークやミーティングなど、アクティブラーニングへの取り組みに対応したオープンスペース。大型モニターやホワイトボードが自由に利用できるよう設計され、ラーニング・コモンズという自由な発想で、学生の自主的で活発な学びのスタイルを可能にするスペースです。



4F 響流館への連結ブリッジ

新教室棟「慶聞館」4階と、図書館・総合研究室・博物館・真宗総合研究所が配置される響流館3階との移動がスムーズに実現するブリッジです。



吹抜け[館内重力換気]

1階から5階に抜ける中央の吹き抜けは、上階につれて開口部を広くした設計とし、暖まった空気を屋外に排気する構造となっています。



4F/5F 個人研究室

教員の研究活動と学生の学びを支援するために、プライバシーと開放性を両立できるよう整備。



1F 語学学習支援室



1F 文藝塾



教室

スクール形式の授業だけでなく、多様な授業形態に対応する移動機タイプの教室を多数配置。全館のWi-FiをはじめとするLAN設備と、さまざまなデバイスを扱うAV設備が充実しています。  
※教室名は4桁(K000)の番号で表記



1F 学習支援室



1F 学生支援部事務室

1階中央エントランスに広がる学生ロビーを中心に、多様な教育空間を有機的に配置し、自らの「学び」が実現するようにサポートします。

中央エリアの1F中央部には、学生自身のさまざまな活動に利用できる多目的のスペースとしての機能を備えた広大な「学生ロビー」を配置し、その周辺にキャリアセンターをはじめとする学生生活のサポートを行う事務室が設置されています。また、学生ロビーの周囲には、大学での基礎的な学習を個別に支援する「学習支援室(LEARNING SQUARE)」、留学・語学学習活動を幅広く支援する「語学学習支援室(GLOBAL SQUARE)」、学習・研究活動の基盤となる読み書きの高度な学修環境を提供する「文藝塾」を集約するなど、多彩な教育空間を実現しました。

別添資料として実習先の承諾書13枚を添付した



教育実習実習施設一覧			
学級数の合計	中学校 30 学級、高等学校 197 学級		
学校名	大谷中学校（京都府京都市東山区今熊野池田町） 学級数：12 生徒数：307 人		
教員数	28 人 （内訳） 教諭 16 人、 助教諭 0 人、 講師 11 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	京都光華中学校（京都府京都市右京区西京極野田町 39 番地） 学級数：6 生徒数：121 人		
教員数	11 人 （内訳） 教諭 11 人、 助教諭 0 人、 講師 0 人、 養護教諭 0 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	札幌大谷中学校（北海道札幌市東区北 16 条東 9 丁目） 学級数：12 生徒数：255 人		
教員数	21 人 （内訳） 教諭 16 人、 助教諭 0 人、 講師 4 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	大谷高等学校（京都府京都市東山区今熊野池田町） 学級数：43 生徒数：1623 人		
教員数	74 人 （内訳） 教諭 55 人、 助教諭 0 人、 講師 18 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	京都光華高等学校（京都府京都市右京区西京極野田町 39 番地） 学級数：16 生徒数：398 人		
教員数	32 人 （内訳） 教諭 31 人、 助教諭 0 人、 講師 0 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	伊那西高等学校（長野県伊那市西春近 4851 番地） 学級数：16 生徒数：435 人		
教員数	37 人 （内訳） 教諭 34 人、 助教諭 0 人、 講師 2 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	飯田女子高等学校（長野県飯田市上郷飯沼 3135-3） 学級数：21 生徒数：572 人		
教員数	44 人 （内訳） 教諭 38 人、 助教諭 0 人、 講師 5 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	昭和学園高等学校（大分県日田市日ノ出町 14 番地） 学級数：24 生徒数：521 人		
教員数	62 人 （内訳） 教諭 32 人、 助教諭 7 人、 講師 22 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	豊田大谷高等学校（愛知県豊田市保見町南山 1） 学級数：23 生徒数：775 人		
教員数	42 人 （内訳） 教諭 33 人、 助教諭 0 人、 講師 7 人、 養護教諭 2 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	小松大谷高等学校（石川県小松市津波倉町 1） 学級数：25 生徒数：818 人		
教員数	50 人 （内訳） 教諭 45 人、 助教諭 0 人、 講師 4 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
学校名	札幌大谷高等学校（北海道札幌市東区北 16 条東 9 丁目） 学級数：29 生徒数：835 人		
教員数	44 人 （内訳） 教諭 38 人、 助教諭 0 人、 講師 5 人、 養護教諭 1 人、 養護助教諭 0 人、 栄養教諭 0 人		
教育委員会名	京都府教育委員会	中学校：4 校	高等学校：50 校
教育委員会名	京都市教育委員会	中学校：73 校	高等学校：9 校



## 自己点検・評価規程

2013年2月25日 制定

### (趣旨)

第1条 この規程は、大谷大学学則第2条、大谷大学大学院学則第2条及び大谷大学短期大学部学則第2条の規定に基づき、大谷大学及び大谷大学短期大学部(以下「本学」という。)が行う自己点検・評価に関する必要事項について定めるものとする。

### (体制)

第2条 本学は、全学的な内部質保証（自己点検・評価を実施し、その結果に基づき改善活動に取り組み、教育研究が適切な水準にあることを自ら証明する恒常的・継続的プロセス）の推進に責任を持つ組織として、大学運営会議をこれに充てる。

2 自己点検・評価は、本学の教育研究に関わるすべての組織(以下「組織等」という。)において、実施する。

### (点検・評価項目)

第3条 組織等は、大学基準協会が定める次の基準の点検・評価項目に基づいて自己点検・評価を行う。

- (1) 理念・目的
- (2) 内部質保証
- (3) 教育研究組織
- (4) 教育課程・学習成果
- (5) 学生の受け入れ
- (6) 教員・教員組織
- (7) 学生支援
- (8) 教育研究等環境
- (9) 社会連携・社会貢献
- (10) 大学運営・財務

### (大学運営会議の審議事項)

第4条 大学運営会議は、学長会及び大学運営会議規程第7条第1項第3号に基づき、次の事項を審議する。

- (1) 自己点検・評価の実施に関する事項
  - ア 自己点検・評価に関する計画の決定及び推進
  - イ 自己点検・評価結果の検証及び総括

- ウ 自己点検・評価報告書の公表
- (2) 内部質保証に関する事項
  - ア 内部質保証のための方針及び手続の策定
  - イ 内部質保証システムの適切性の点検・評価
  - ウ 自己点検・評価結果に基づく改善の指示及びその検証
- (3) その他必要な事項
  - ア 外部評価結果の検証
  - イ 認証評価の受審及び評価結果への対応

(公表及び改善報告)

第5条 自己点検・評価報告書の公表は、学長が行う。

- 2 前条第2号ウにより改善を指示された組織等は、大学運営会議が定める期間内に、その改善状況について大学運営会議に報告しなければならない。

(自己点検・評価運営部会)

第6条 大学運営会議は、大学運営会議が第4条第1号ア、第2号イ及び第3号を行うために、自己点検・評価運営部会（以下「運営部会」という。）を置く。

- 2 運営部会の委員は、次のとおりとする。
  - (1) 学監・副学長
  - (2) 学長補佐
  - (3) 企画・入試部事務部長
  - (4) 総務部事務部長
  - (5) 学生支援部事務部長
  - (6) 教育研究支援部事務部長
- 3 運営部会の部会長は、前項第1号委員とする。
- 4 運営部会が必要と認めた場合は、委員以外の出席を要請し、意見を聴くことができる。

(運営部会の任務)

第7条 運営部会は、次に掲げる任務を遂行する。

- (1) 自己点検・評価の計画の策定に関する事項
  - (2) 内部質保証システムに関する報告書の作成
  - (3) 組織等が作成した自己点検・評価報告書のまとめ
  - (4) 外部評価の実施
  - (5) 認証評価受審のための報告書の作成
- 2 外部評価の実施については、「外部評価に関する細則」に定める。

(所管)

第8条 この規程に関する事務の所管は、企画・入試部企画課とする。

(改廃)

第9条 この規程の改廃は、教授会の議を経て、学長が決定する。

付 則

- 1 この規程は、2013年4月1日から施行する。
- 2 「大谷大学自己点検・評価規程(2003年11月1日制定)」は、廃止する。

付 則

この規程は、2017年3月9日に一部改正し、2018年4月1日から施行する。

付 則

この規程は、2018年3月1日に一部改正し、2018年4月1日から施行する。

付 則

この規程は、2019年2月20日に一部改正し、2019年4月1日から施行する。

付 則

この規程は、2020年3月5日に一部改正し、2020年4月1日から施行する。



## 外部評価に関する細則

2019年2月19日 制定

### (目的)

第1条 この細則は、自己点検・評価規程に基づき、外部評価者による点検・評価を必要に応じて行うことにより、自己点検・評価の客観性を担保し、内部質保証システムの適切性の向上に資することを目的とする。

### (実施方法)

第2条 外部評価は、自己点検・評価報告書を基に、外部評価者による点検・評価によって、実施する。

### (委嘱)

第3条 外部評価者は、学外の学識経験者等のうちから学長が若干名を委嘱する。

### (任期)

第4条 外部評価者の任期は1年とする。

### (業務)

第5条 外部評価者の業務は、次のとおりとする。

- (1) 自己点検・評価報告書に基づく内部質保証システムの点検・評価
- (2) 自己点検・評価報告書に対する指摘及び助言を付した報告書の作成
- (3) 外部評価者会議への出席

### (守秘義務)

第6条 外部評価者は、前条の業務を行う際に知り得た事項を、他に漏らしてはならない。

### (所管)

第7条 この細則に関する事務の所管は、企画・入試部企画課とする。

### (改廃)

第8条 この細則の改廃は、大学運営会議の議を経て、学長が決定する。

### 付 則

この細則は、2019年4月1日から施行する。

